第 12 巻

求寿

SEIJU

1989 春号

横浜 善光寺刊

拝啓 残暑きびしき折柄
市僧侶のことと拝察いたします
「成寿」第十五号をお送り致します
今回は韓国仏教を特集しました
日韓関係が新しい局面を迎えた
年でもありますのでぜひお読みくだ
さいたくお願い申し上げます
まずは取急ぎ申し上げて時候挨拶と
いたします

金雲

平成二年八月吉日

雲龍寺住職 墨岡武志

各位

他の過ちを見るなかれ
他の作さざるを責むるなかれ
己が何をいかに作せしかを
自らに問うべし

〈法句経〉

第 12 巻

成寿

SEIJU

1989 春号

ロス・ゼンマウンテンの法戦式

少水、常に流れて石を穿つ

平成元年を迎えてはじめてお届けする本誌ですが、通巻第十二号となりました。思えば六年前の秋、当寺開創十五周年を記念して創刊して以来、今日に至ったわけであります。

これは檀信徒の皆様方の絶大なる御協力により海外で留学生活を続ける僧たちよりの原稿によるものも大きいと考えます。

過日、第五回の留学僧に対する辞令交付式をおこないましたが、いまや派遣者数は二十二名、派遣国は九ヶ国に達しております。そしてインド留学僧の安井隆同師がこのほどカルカッタ大学より博士号を授与されました。皆様に御報告申し上げるとともにこの栄誉をはげみとして留学僧の派遣育英事業にさらに一層の精進をと心に誓っております。

釈尊は最後の教誡（きょうかい）『遺教経（ゆいきょうぎょう）』において、出家修行者の積極的な生き方として八大人覚（はちだいにんがく）、つまり大人（だいにん）・大丈夫（だいじょうぶ）の修すべき八種の法門

を説いておりますが、第四番目の「精進」につき、次のように述べております。

汝等比丘、若し勤めて精進すれば、則事として難き者なし。是の故に汝等当に勤めて精進すべし。譬えば少水の常に流れて、則ち能く石を穿つが如し、若し行者の心数々懈廃すれば、譬へば火を鑽るに未だ熱からずして而も息めば、火を得んと欲すと雖も、火を得べきこと難きが如し。是を精進と名づく、と。

現代風にいうと、何事も一心不乱に努力すれば成就しないものはない。たとえばせせらぎのような流水であっても、常に流れておれば石に穴をあけるように。また途中で修行を中断したりすると悟りの道はますます遠のいてしまう。木をこすって火を得ようとするとき、途中でやめてしまったら、遂に火を得ることができないように、というのであります。

このみ教えは釈尊の教えを奉ずる者すべてに与えられたものとして受け止め、少水の常に流れて石を穿つ微力の相続を念じております。

上：法戦式に向かう随喜衆（先頭・方丈と佐藤老師）

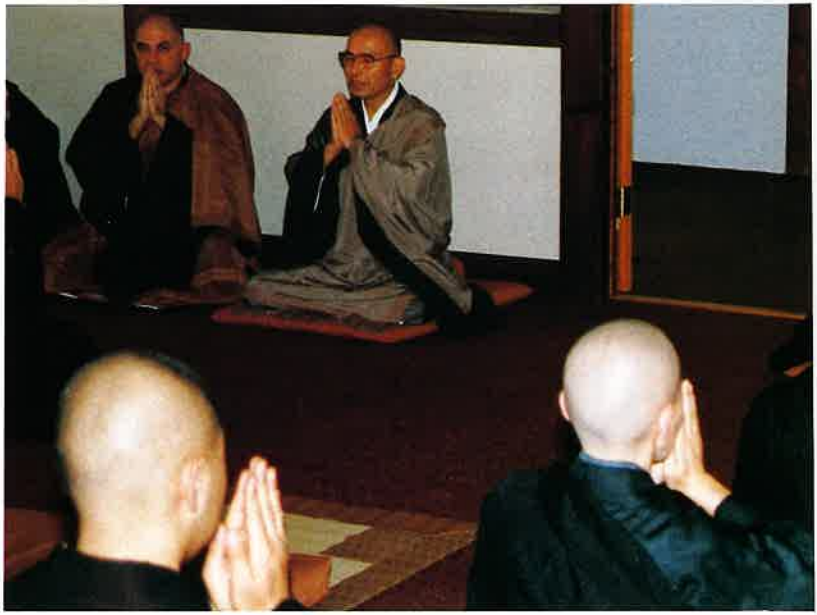
左上：本則行茶　礼拝するのはウェンディ恵玉首座

左下：法戦式で問答をかける同僚

▲
◀禅堂での法要

法要に参列する安居者

詳細は本文に



森の中の昼食会

上・方丈と佐藤老師の上殿を告げる殿鏡

左・方丈と佐藤老師を見送るメンバー

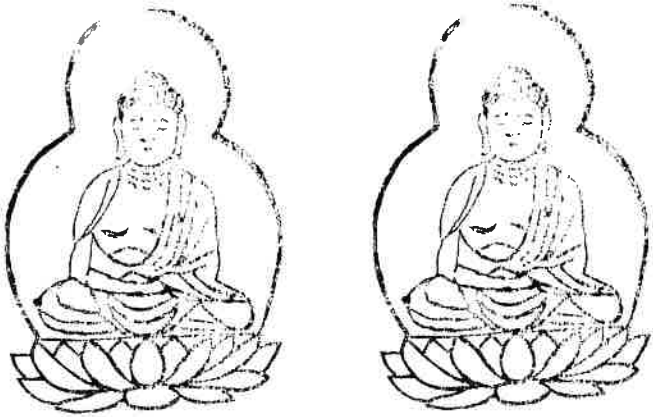
ゼン・マウンテンセンター・オブ・ニューヨーク

平成元年第一日

――雨の日曜日――

赤間義徳

空にはりついた
雨雲の向こうに
青空がひろがり
その中心に
太陽が輝いていることを
私たちは信じている。
いま見えないものを
はっきりと見て生きている。



海外留学僧派遣制度のための茶筒に
きょうの分を貯金することから
私の平成元年をはじめよう。
私の貧しい心に
青空がひろがりはじめ
いまここからは見えない
二十二人の海外留学僧が見えてくる。
地球のあちこちに
太陽の種子を蒔く姿が
次第にはっきりと見えてくる。

法句経

巻頭言　黒田　武志（大圓）

カラー■ロス・ゼンマウンテンの法戦式

エッセイ●仏像との出逢い……黒田　武志　18

特　集●前角老師の偉業……佐藤　俊明　22

連　載●くらしの中で読む『正法眼蔵』……小倉　玄照　60

留学記●出版記念パーティ(1)……阿部　慈園　68

●本尊さまがどこかに行ってしまった……河内　義宣　72

●闇の中での宗教体験……保坂　俊司　75

●学位授与式を終えて……安井　隆同　79

●インドの結婚式……清水　晶子　82

詩　●ひとりじゃない……山本　瓔子　86

●日本の英語教育と私の英語力……島　岩　88

留学記●アメリカ留学体験記……島崎　義孝　101

善光寺だより……117

読者からのお便り……122

題字・グラビア・さし絵　伊藤三喜庵

カット　古刷仏集より

仏像との出逢い

住職　黒田武志（大圓）

金もなく、托鉢をしながら日本一周の行脚をしていた時に、泊めていただいたお寺のおばあさんが、私におみやげをくださった。

それは五センチほどの小さな木彫りの観音さまで、私にとってははじめての、正式な仏像の勧請となった。

数年後、タイに修行に渡ろうという時に、念持仏として一葉観音を勧請しようと発願したのは、道元禅師が中国から帰られる時、嵐で船が沈みそうになった折、「念彼観音力」と観音さまを念じたところ、一枚の木の葉に乗った観音さまが天から降ってきて、波をしずめて船の難破を救ったという逸説から、これを自らの念持仏にしたいと願ったからだった。

ところが妙な縁で、造仏を依頼に行った仏師の方が、かたわらの不動明王を示しながら〝どこへでも持っていってくれ〟というのでワケを聞くと、ある日、見知らぬ年老いた婦人が訪ねてきて「お不動様をお迎えしろとおっしゃるので、四国から参りました。伺っておどろいたことに、夢のお告げと全く同じところです。どうか私にこのお不動様をお授けください」と懇願されたが、どうしたものかその方におゆずりする気になれず断ったものの、気にかかって仕方がないのだという。

困りはててい た時に、丁度私が行きあわせたのである。「どこへでも持っていってくれ」という言葉をいただいたのも縁であるならば、お不動様をお預りするのも与えられた縁であろう。

そう決意したものの、譲っていただくための金はなく、師匠（黒田白純）に頼み込んで何とか資金を調達し、むろん寺を持たない私は、本寺（光真寺）に願って、お不動さまを預かって、いただくこととなった。

その間、タイやアメリカを修行してまわり、小さな草庵にようやくお不動さまをお迎えしたのは、四、五年のちのことであった。

この不動明王は、身代わり不動と呼ばれるその名の如く、身を七つに変じて救ってくださるという。

禅宗では、霊的なものを重んじることはないが、私自身感得した不思議な縁もまた、仏のさし示して下さった道であろうと、この縁を大切に歩んできている。

身代わり不動明王をいよいよお迎えするという時、夢を見た。

総持寺が燃えている。これは大変だと師匠と共に総持寺にかけつけてみると、焼けてはおらず、勅使門のうしろの長廊下の中雀門のところに、お不動さまの台座だけが残っている。お不

横山善光寺
不動明王と両童子
三喜庵

動さまが身代わりになって自らを焼き、総持寺を救った、という夢であった。

それ以来、自坊は幾多の困難も切り抜けられるという確信を得て二十年を数える。

その後、タイ・ビルマ・中国の仏さまたちを、それぞれの縁を得てお迎えすることとなり、なかでも、善光寺釈迦殿の設計をして下さった伊藤喜三郎先生よりお預かりした円空仏は、「日限り不動明王」として、檀家の方々の礼拝の対象となっている。

笑っておられるから気味が悪いとおっしゃるので、善光寺でお預かりすることになった仏さまで、本当に笑っておられる。日々、その笑顔が変わる。

「日限り不動明王」とは、一日に千里の道を行って帰るといわれている。召し上がるものは洗米と芋類。じゃがいも、さつまいも、さといも、何でもよく、それに加えて昆布を召し上がる。そしてキュウリ十本に赤飯一升。大食の仏さまでもある。

毎月二十八日にこれをお供えしておまつりさせていただいているが、一日に千里の道もいとわず歩いて人々を救い、そしてまたこの寺に帰ってこられる。そんなご苦労をねぎらうのにはあまりにも粗末なお供えではあるが、心をこめて好物を供えることが、私の精一杯の感謝である。

不動明王は大日如来の眷属（けんぞく）である。この大日如来をお迎えするのも、私の使命であろうと、造仏を依頼し、開眼のはこびとなった。

縁もゆかりもない、一介の托鉢僧に贈ってくださった小さな一体の観音像が、たくさんの仏たちを呼びよせてくださり、いま、人々に救いの手をさしのべてくださることを思うとき、仏の縁の不思議と深さを思う。

前角老師の偉業

海外留学僧派遣育英会常任理事
龍光寺住職　佐藤俊明

在家人も九旬安居

日本では見ることもできない、珍しく、素晴らしい首座法戦式に参列することができた。

首座は、日本人を父とし、ポルトガル人を母とするウェンディ恵玉中尾という中年女性で、参列者の国籍は十四にも及ぶ、正に国際色豊かな法戦式だった。

法戦式の模様については後述するとして、まずこの法戦式に参列し得た機縁と、法戦式の背景について述べよう。

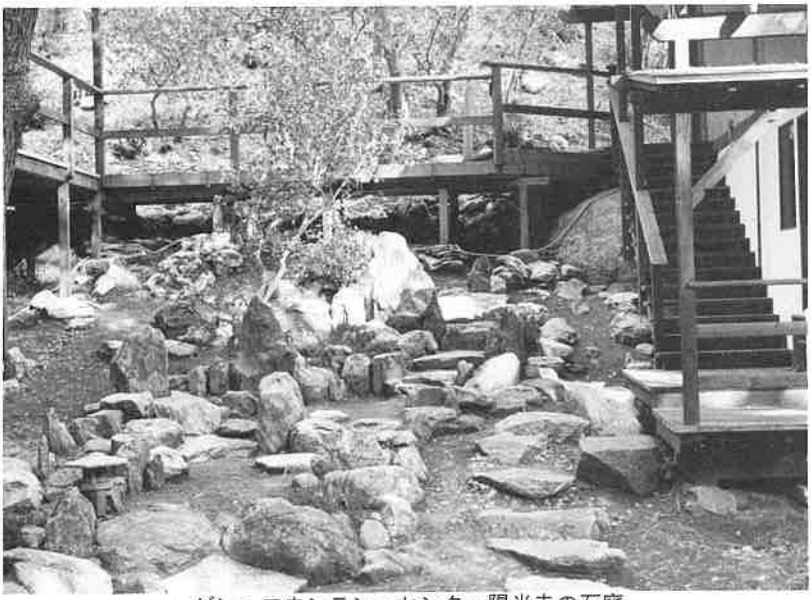
横浜・善光寺の海外留学僧派遣育英会では、アメリカをはじめとする八ヵ国に、すでに十七人を派遣している。理事長である善光寺の黒田武志方丈は、機に応じて受け入れ先を訪ねているが、常任理事の私も時には、ということで、このたびの渡米と相成った次第である。実は涼しくなってからと思っていたのだが、過般来日されたロサンゼルス・ゼン・センター（ZCLA）仏真寺主管の前角博雄老師から「せっかく

来られるなら、安居中に来てほしい。八月二十八日安居終了の日、首座法戦式があるから、ぜひ見てほしい」といわれ、それでは、ということで八月二十六日成田を飛び立つことになった。

私が前回ＺＣＬＡ（仏真寺）を訪ねてから十年になる。その後のＺＣＬＡのあゆみについては、善光寺留学僧の島崎義孝君が中外日報（八月八日号）に詳述しているので、つとめて重複をさけて、見たまま聞いたままを述べてみよう。

洞谷山にそっくりの陽光寺

前角老師は今から九年前、大都市の喧騒をさけて、ロサンゼルスから百二十マイル南に広大な山地を入手し、ＺＣＬＡ直属の組織として「ゼン・マウンテン・センター」をつくり、神戸・八王寺の先住、志保見道雲老師（昭和五十九年没）を開山に勧請し、道雲山陽光寺と命名し、



ゼン・マウンテン・センター陽光寺の石庭

仏真寺の末寺とした。

ロサンゼルスからクルマで二時間有余、境内にさしかかり老樹うっそうとした山路を進むにつれ、私はふと洞谷山永光寺の風光を想起した。そして、樹間に雑然と駐車された三、四十台のクルマや数張りのテントを見ては「われ棲める那坂の山も　踏みならし　苔の下きて　人ぞ訪ひ来る」と瑩山禅師の歌を口ずさんだりして、〝ああそうか、道雲山陽光寺か。なるほど！〟と、私だけの感懐でないことに気付いたりした。それほど永光寺によく似た感じで、私は前角老師に、「洞谷山の十境になぞらえて、道雲山十境を選定しては」と進言したりした。

建物は禅堂と本堂・台所、方丈の三棟しかないが、ここでは毎年夏の結制修行がおこなわれている。(冬安居はロサンゼルス仏真寺でおこなわれる)　結制といえば今日の日本においては、僧堂以外では晋山と抱き合わせの上堂と法戦式がおこなわれる程度だが、ここでは九十日の安居がおこなわれている。

安居はいかにもアメリカ社会らしく、僧俗・男女一体の協同生活としておこなわれ、彼らはこれを「サンガ」と称している。それにしても参加費は三ヵ月の場合千二百ドルというから、十六万円程度。準会員になると千五百ドルで約二十万円。これだけの金を支弁し、仕事を休んで安居することは、日本の社会では到底考えられないことである。

「会社、クビになりませんか」とたずねたら、にっこり笑って「大丈夫」と言っていた。

そう言い切れるほど職場でも安定した地位を得ているであろう中年層が多く、経済的にもゆとりのある様子がうかがわれた。こころなしか、心理学とコンピューター関係者が多いように思えた。

コンピューター会社の社長に、「コンピュータ

ー関係者が多いのはどうしてですか」とたずねたところ、「わかりませんねえ」という。「コンピューターに聞いてもわかりませんか」「わかりませんねえ」と笑ったりした。

今年の安居者は六十数人に及び、建物に入り切れず、テントの中で夜を過ごす者もいた。国籍はアメリカ、メキシコ、ポーランド、フランス、イギリス、カナダ、アイルランド、スコットランド、オランダ、オーストラリア、ノルウエー、アルゼンチン、ブラジル、日本という多彩のもので、ルーリー慈蓮（じれん）バロガン女史などは、メキシコから六年間、欠かさず安居を続けているという。メンバーは一般に知的水準が高く、翻訳された仏教書、禅籍はよく読んでおり、相当高度の話も理解される風だった。

日本人の中には善光寺留学僧の岩波弘道君（第三次派遣）がいた。いっしょに派遣された島崎義孝君は目下、前角老師の高弟デニス・メ

ルツェル玄法師とともにポーランドに行っているので、岩波君は留学僧として二人分頑張っていた。僧俗一体の「サンガ」には日本僧の果たす役割は大きい。

粥罷作務のあとの一炷（いっちゅう）の坐禅に引き続き、十一時三十分から一時間半が提唱の時間である。八月二十七日、この時間帯が私のためにあてられたので、私は「仏真寺に拝登（はいとう）して総持寺開創の偉業を思う」と題して、次のような話をした。彼等が「サンガ」発展の基礎を初期曹洞宗の黎明期に求め、すでに永平寺三代相論についても討議していたことを、島崎レポートで読んでいたからである。

二つの月

皆様方が拙著『二つの月』の英訳本をお読みになっておられることはかねて聞いておりましたが、このたび皆様方のお国に参上し、日頃皆

提唱中の筆者

様方を指導しておられる前角老師に通訳を煩わして、皆様方にお話しできる機会を与えられましたことは、私の無上のよろこびとするところであります。

両箇の月はご承知のように瑩山禅師が峨山和尚を真の後継者として育成すべく、峨山和尚の心底を穿って与えた慈悲心溢れる公案であります。

峨山和尚は十六歳のとき比叡山に登って出家し、八年間、仏教学、とくに天台の教学を修め、その蘊奥を究めました。しかし、真の宗教的安心は学問仏教では得られないことを悟り、比叡山を下って瑩山禅師の会下に投じて禅の修行にはげみました。彼は資性英敏にして筋骨逞しい偉丈夫で、見るからにたのもしく、瑩山禅師はよき後継者に恵まれたことをよろこんだのであります。しかし半面、峨山和尚の、頭のよさを自負している姿、人をしのぐ高ぶりの態度には、心ひそかに案ずるところがあり、〝いつか機会を見て〟と、時節の到来を待ったのであります。

冬の或る夜、月は中天に明るくさえわたり、山も河も、野も里も、清らかな月光に照らされ、えもいわれぬ美しい光景を描き出しており、身も心もそぞろに光に映徹するかのようでありました。

瑩山禅師は、ふと思いついたかのように「峨山和尚、月に両箇あることを知っているか？」とたずねました。

「……」

合点がいかず、返答をためらっている峨山和尚を見て瑩山禅師は、低いがおごそかな口調で言いました。

「月に両箇のあることを知らずんば、洞上の種草となしがたし」

日ごろにないきびしい瑩山禅師の言葉に、峨山和尚はかつて経験したこともない強いショッ

クを受けたのであります。この瞬間から峨山和尚の態度は一変しました。慎み深く大衆に一如した綿密な行持、きびしい坐禅修行。増上慢はみじんも感じられなくなりました。しかし、半年経っても一年経っても「両箇の月」の疑雲はさらに晴れそうもありませんでした。

こうして三年の月日が流れ、彼が二十六歳の年の十二月二十三日、北国の空には寒月がすさまじいまでに冷たく、こうこうとさえわたっておりました。その月の光を浴びて静かに坐禅にはげんでいる峨山和尚の姿を見て、その心境の一段と深まったことをはっきり読み取った瑩山禅師は、峨山和尚の耳もとで指をはじきました。それはまことにささやかな音ではありましたが、峨山和尚には三年の間なやみ続けた大疑団を打ち砕く大音響にひびいたのであります。

「ああ、そうだ。このことだ！」

峨山和尚には、月に両箇ありといわれた瑩山禅師の心が、はっきり会得されたのであります。

両箇の月。一つはいうまでもなく中天にかかって澄み抜いている月であり、いま一つは、その月の光を受けて輝く地上の万物の光のことであります。それは、どれほど仏教教理に精通していても、それが日常生活に肉体化され実践化されて、喫茶喫飯から排便放尿にいたるまで、生活万般にわたってそのまま顕現してくるのでなかったら真のさとりとはいえず、したがって「洞上の種草となしがたし」という、峨山和尚の心底を穿った瑩山禅師の鋭くきびしい指導だったのであります。

峨山和尚は、この一つにして二つ、二つにして一つの関連するところを、今こそはっきりとわがものとすることができたのであります。瑩山禅師の教えの真髄にふれることのできた峨山和尚の歓びと感激は、たとえようのない大きなものだったにちがいありません。

ここから、瑩峨両尊の二つの月の光の輝きが国中を照らすにいたる、一心同体のめざましい教化活動がはじまるのであります。

宗旨と宗門

大本山総持寺は瑩山禅師の開創になるものですが、瑩山禅師が総持寺に住持したのはわずか三年に過ぎません。これに対して峨山禅師は住山四十余年、弄精魂の心血を注がれたのであります。したがって、総持寺発展の実質的な基礎づくりは二祖峨山禅師によってなされたのであります。ゆえに総持寺では、開祖瑩山禅師と二祖峨山禅師を古来より御両尊と尊称し、均等無差に供養給侍して今日に及んでいるのであります。

これはひとり総持寺だけにみる特異なものではなく、実は宗門の寺院においては、第二祖が実質上の開祖である場合が少なくないのであり

觀世音南無佛與佛有因與佛有緣
佛法僧緣常樂我淨朝念觀音
暮念念觀世音念念從心起念念不離心

ます。現に仏真寺においてもそのとおりで、この寺は前角老師の開創になるものであります。しかし、前角老師は自らを開山とせず、師匠の楳庵白純（ばいあんはくじゅん）大和尚様を開山に迎えておられるのであります。私と同道して来られ、ここにお見えの前角老師の実弟、黒田武志方丈の場合もそうであります。横浜の善光寺はこの黒田老師の開創になる寺ですが、やはりお師匠様を開山に勧請して自らは第二世となっておられます。ここに伝法、伝光を重んじ、師匠に蔵身（ぞうしん）する宗門の美風があるのであります。このことは曹洞宗自体の歴史をみる場合にも重要な視点であります。

曹洞宗以外の宗派においては、教祖と宗祖が同一人格でありますが、ひとり曹洞宗のみはこれと違い、高祖と太祖の両祖を仰ぎ、高祖の開いた永平寺と太祖が開いた総持寺は同列同格の大本山という特異の形態をとっております。これはどういうことかというと、栗山泰音禅師著『総持寺史』に次のように述べてあります。

およそ一宗の成立するには、宗旨の開顕と宗門の開発との二原由がある……。

わが日本の曹洞宗は、永平大師が興聖永平の両寺に依ってその宗旨を開顕せられたが、いまだ宗門の開発はなかった……。

瑩山大師が総持寺に依ってはじめてその宗門を開発せられて、ここに一つの宗体がそなわったのである……。

では、なぜそうなったのか。ここでいささか仏教史をさかのぼって考えてみたいと思います。

仏教には五千七百の経巻があるといわれるように、実に多くの経論があり、その説くところは種々さまざまで、互いに異なっております。これらの経論が漢訳され、雑然としてインドから中国に渡来しました。そのため中国の仏教徒

は、はじめ困惑し、帰趨に迷いましたが、やがて、数多くの経論の中から、いずれか一つの経または論を依り処として仏教を理解し、その他の経論をばそれに従属せしめて体系化し、位置付け、仏陀の真の意図を明らかにしようとする努力がなされました。その結果、自らの教学の依り処となった経典や教儀内容の優位を主張する傾向が強くなり、それが宗派成立の要件となりました。すなわち、華厳宗は『華厳経』を、天台宗は『法華経』を、浄土門は三部経を、それぞれ至上最高のものとし、これを柄杓として仏陀の教えの泉を汲み、時処位に応じてその宗教的生命を活かそうとしたのであります。

このように、各宗派は、それぞれ信奉する経典を中心とし、それを依り処として成立したのですが、ここに一つの批判が生まれてきました。

数多い経典の中から特定の経典を依り処とすることは、仏教全体を正しく理解するゆえんではない。ましてや文字は月を指す指にすぎない。指は月のありかを指し示すことはできても、月そのものではない。経典は仏心の周辺を示すことはできても仏心そのものを示すことはできない。そこで、よろしく経典の生まれいずる根源にさかのぼらなくてはならぬ、と主張する宗派があらわれてきました。

経典の生まれいずる根源とは何かというと、釈尊がお経を説かれるときは必ず禅定に入られた。だから端的に坐禅を修して三昧に入り、仏心になり切らねばならぬ、というのが坐禅宗、すなわち禅宗の側の主張であります。

『正法眼蔵』の「弁道話」に、

仏法におほくの門あり、なにをもてかひとへに坐禅をすすむるや。しめしていはく、これ仏法の正門なるをもてなり。とふていはく、なんぞひとり正門とする。しめしていはく、大師釈尊、まさしく得道の妙術を正伝し、また三世の

如来、ともに坐禅により得道せり。このゆえに正門なることを、あひつたへるなり。しかのみにあらず、西天東地の諸祖、みな坐禅により得道せるなり。ゆえにいま正門を人天に示す。

とあるように、仏法の正門は成正覚の姿である坐禅よりほかにないのであります。

さて、禅宗以外の諸宗派をひっくるめて教宗といい、また教宗は経典によって成立しているので仏語宗ともいいます。これに対して禅宗は文字言語を離れ、心によるがゆえに仏心宗ともいわれ、教外別伝・不立文字の立場から文字や言語に捉われることを極度に嫌うのであります。

しかし、それが嵩じて釈尊の説かれた経典まで軽視するとなると、やはりゆき過ぎのそしりを免れません。そこで道元禅師は、禅より出でて禅を排して正伝の仏法を鼓吹されたのであります。というのは、教宗を批判する禅宗は、な

お教宗に対するものとして教宗と同列の相対的立場を出でないものであり、道元禅師はその両者をアウフヘーベンした全一の仏法を説かれたのであります。

すなわち道元禅師によれば、禅宗と自称するものは「仏道をやぶる魔なり、仏祖のまねかざる怨家なり」「宗の称を立せん、如来の弟子にあらず、祖師の児孫にあらず、重逆よりもおもし」（『正法眼蔵』「仏道」）なのであります。その真意は、正伝の仏法とは、釈尊の菩提樹下における成正覚を頂点として、それに至る手だてとして説かれた経典は、いずれも仏法そのものであります。こうして全一の仏法を道元禅師の立場からすれば、一宗一派を分立することは許しがたいことなのであります。ではなぜ曹洞宗という宗名が用いられるようになったのでありましょう。

ここに瑩山禅師登場の歴史的意義があるのであります。

太祖の功業

道元禅師は西暦一二〇〇年に誕生されました。これは宗門の歴史を考える上に基礎となるものですが、私ども児孫にとってまことにキリのよい、覚えやすい便利な数字であります。この、道元禅師の誕生からおくれること六十八年、一二六八年に瑩山禅師が誕生されました。道元禅師と瑩山禅師の誕生に六十余年の開きがあったことは意義深いことであります。

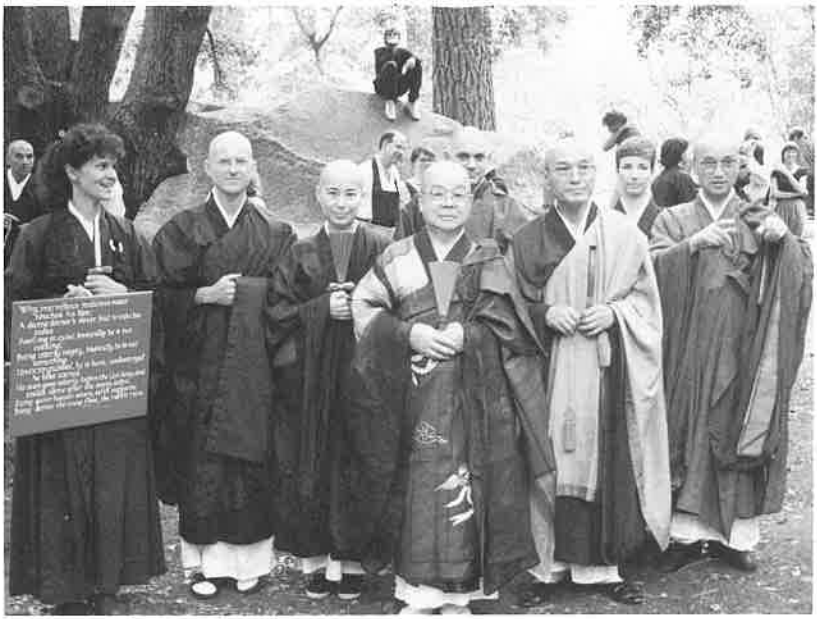
と申しますのは、いま二十一世紀に向かっていろいろ取り沙汰されておりますが、一つの思想なり動きなりが生成発展して次の新しい段階を迎えるのにおおむね百年かかる。そこで百年を一世紀として一つの節目としているわけですが、東洋では六十年経つと本卦返り、還暦といいます。これは六十年が一世紀ということであ

ります。日本は島国でものの動きのテンポが早く、六十年を一世紀とみるとよく割り切れる場合が少なくありません。

たとえば、道元禅師が大仏寺を開かれたのは一二四四年で、五十年後の一二九三年には義价禅師が大乗寺を開き、ちょうど六十年目の一三〇四年に瑩山禅師が大乗寺二世に補せられております。

こうして道元禅師の開創になる永平寺教団が三代相論という世紀末的な結着をみせた折も折、初期曹洞宗胎動の黎明期に瑩山禅師が登場されたのですが、瑩山禅師のすばらしい性格と超人的な活躍が曹洞宗の形成に大きな役割を果たされたことは、宗門にとってなにものにもまさる有り難い法の幸でありました。

道元禅師が出世間的、脱俗的、理智的、学究的で宗旨の確立に理想的であったのに対し、瑩山禅師は世間的であり、情意的であり、実践的



前列左から弁事・書記・首座・筆者・前角老師・黒田方丈

普賢菩薩

で宗門の開発に秀でておられました。つまり道元禅師は創業の徳に欠けるところなく、瑩山禅師は守成、経営の才において備わらざるはなく、道元禅師の宗旨をよく時勢に調和させ、ひろく大衆化されたのであります。すなわち、道元禅師の宗教は、旧仏教と世俗に隔絶した、高く深くきびしい孤高飄逸の純粋禅でありましたが、瑩山禅師のそれは、民衆化、衆生済度を第一義とし、旧仏教を容認し、祈禱や民間信仰をも包む、新しい時代にふさわしい純粋禅でありました。

そんな純粋禅があるかという人がおられるかも知れませんが、それは「月に両箇のあるを知らない」人のたわごとで、純粋禅とは衆生済度の大乗的立場に立った只管打坐の禅であり、これを以て衆生済度を実践化するには、祈禱や民間信仰を包容しなくてはなりません。瑩山禅師は只管打坐の修行生活を自ら行じつつ、その禅風を広く社会にひろめ、浸透させていったのであります。

賜紫出世の道場総持寺

こうした瑩山禅師の衆生済度の実践の在り方は、真言宗という平安時代の旧仏教を改宗のもとにおこなわれた総持寺の開創（一三二一年）ともなり、瑩山禅師の名声は逸早く中央地方にひろまり、後醍醐天皇から「十種の勅問」がくだり、それに対する瑩山禅師の奉答が深く叡慮にかない、一三二二年八月二十八日、綸旨を賜い、総持寺は日本曹洞宗賜紫出世の道場となるのであります。その綸旨の要旨は次のようなものであります。

能登国の諸獄山総持寺は、中国の曹渓山六祖大鑑慧能禅師の正しい法灯をついで、それより洞山良价禅師に伝わる曹洞禅の奥深い道理を宣揚してきた。それ故とくに日本にふたつとない

禅苑であるので「曹洞出世の道場」に補任する（出世＝綸旨を賜い紫衣を着すること）……。

この、綸旨の下賜については、歴史的事実として疑義もあるが、長い宗門史において、総持寺はこの綸旨によって、出世道場としての一宗の本山たることが認められ、同時に総持寺を中核とする宗団が正式に曹洞宗と称する教団となったと伝承されてきたのであります。

以上、竹内道雄師著『総持寺の歴史』によって述べましたが、瑩山禅師が高祖道元禅師と共に太祖瑩山禅師として仰がれるゆえんがおわかりいただけたことと思います。また、総持寺が永平寺と同列同格の本山である意義もご理解いただけたことと思います。

峨山禅師と輪住制度

瑩山禅師の多くの弟子のうち特にすぐれていたのは明峰素哲、峨山韶碩、無涯智洪、壺庵至簡の四人で、これを四哲といい、孤峰覚明、珍山源照の二人を加えて六兄弟といいます。

就中、峨山禅師は総持寺第二祖となり、瑩山禅師の遺志を体して弟子の養成につとめ、総持寺の輪住制度を確立して曹洞宗教団発展の基礎を磐石のものとしました。

峨山禅師には二十五人のすぐれた弟子、二十五哲がおりますが、中でも太源宗真、通幻寂霊、無端祖環、大徹宗令、実峰良秀の五人は峨山の五哲と称され、この五哲は総持寺山内に、それぞれ普蔵院、妙高庵、洞川庵、伝法庵、如意庵の五院を開き、互いに協力して曹洞宗教団の本山としての総持寺の運営、発展に努力したのであります。

峨山禅師は総持住山二十八年目（一三六二）、自筆の置文「総持寺未来住持職ノ事」を示し、その中で、

右彼ノ寺ハ瑩山和尚、韶碩ニ譲与スル処ナリ。

仍テ後代ノ住持職ニ於テハ、韶碩法嗣ノ中ニ於テ、器用ノ仁ヲ選ビテ住持職ヲ補スベシ。末代ニ於テ此ノ旨ヲ守リ住持スベキノ状件ノ如シ。

と述べ、総持寺住職たるの自信の程を示すと共に、峨山法系以外の者の介入を許さぬ決意を示しております。

またその翌々年の一三六四年、実に瑩山禅師が永平寺に袂別して大乗寺二世に補せられてちょうど六十年目でありますが、この年には「総持寺山門住持職ノ事」の置文の中では「遺誡」として、

韶碩門下嗣法ノ次第ヲ守リ、五箇年住持スベシ。若シ此ノ中山門廃スル者有ラバ、法眷相寄テ之ヲ評定スベシ。仍テ後証ノタメ、垂示件ノ如シ。

と誡めております。これらの置文は、総持寺の将来において住職として、また門弟として守るべきことを示されたものであります。

すなわち

一、総持寺の住職たるものは峨山禅師の法嗣であり、かつその任に堪える「器用ノ仁」でなければならないこと。

二、門下の法嗣の順序にしたがって、五院の住持が総持寺に輪住すべきこと。

三、総持寺教団の興廃に関する重要事項については法類が合議して定むべきこと。

等であり、この輪住制度が曹洞宗教団の一大発展の原動力となったのであります。

愛山護法の信念と和合

教団を維持する上にもっとも大切なものは、道元禅師から瑩山禅師、峨山禅師、そして自己へと法灯を嫡に相承してきた児孫たちの愛山護法の信念であり、その信念のもとに培われた本山の護持・発展に対する児孫としての自覚と責任感、そしてお互いの「乳水の如き」和合であ

ります。この、本山護持・発展の源泉となる信心と責任感と和合を生み出すために、輪住制度はまことに適切な制度でありました。

この輪住制度により、本山護持の栄誉と責任が一部の者に専有されることなく、児孫の中の有能な人物に分担されることになり、教団全体がいやがうえにも活況を呈するようになったのであります。しかもこの輪住制度は一つの合議制度をなしており、重要事項はすべて五院の協議によって決定されたのであります。　以上のような総持寺教団の輪住制度は、峨山禅師晩年に完成したものでありますが、禅師の滅後、五哲をはじめ、その法嗣たちによって不動のものとなったのであります。

むすび

仏真寺の現在は総持寺開創の当時と非常によく似た一面があります。前角老師の高弟が各地に分散進出して仏真寺の末寺を建立しておられること、そして相協力して本寺仏真寺の発展興隆をはかっていること、あたかも総持寺の五院を思わせるものがあります。

以上申し述べましたことが、仏真寺の今後の運営発展に何等かの参考となれば望外の幸せであります。

美人首座の法戦式

私の提唱のあとは日中諷経、続いてオーリョーキ・ランチ（行鉢）となった。長版が鳴り、それを聞いて修行者は入堂し、応量器をささげ持って各自の食位につく。魚鼓（版）・下鉢版・鳴鼓と鳴り物は如法に鳴らされ、住持入堂して修行者は応量器を座前に置いて趺座する。聞槌・展鉢の偈にはじまり、折水偈にいたるまで、すべては英語で斉然と唱えられること、僧堂の行鉢と何等かわりない。

応量器（出家者以外は代用品）の取り扱いもなかなか堂に入ったもので、逆にこちらがまごつくものだった。というのは、応量器の中に盛られるものはご飯ではなく、野菜をいためてあえたスパゲティで、生飯（さば）を出すとき一体何を取り出したらよいのかに迷い、こっそり隣を盗み見たり、フォークは箸ほど使い易くないので応量器に箸を使ったり、香汁がジュース、香菜が野菜サラダだったりして、どの椀に受けるべきなのかとまどったり、新米の雲水時代を思い出すような気ぜわしい行鉢だった。

前角老師、佐藤老師、方丈

この食事は欧米人にとってはごく質素な、そして異質なものであろうと思われる。私はすでに古稀を過ぎているので、よく昔のことを言うが、かれこれ三十年以上も前のこと、たしか村松梢風という作家だったが、日本人の枯淡な性格を形成した有力な一因は禅宗料理だといって、禅宗料理の功罪というよりは罪の面のみを強調した記事を新聞に載せていた。

そのとき考えさせられたことだが、禅宗料理というのは、長い間の実践の積み上げによってつくり出されたもので、修行僧にとってきわめて、合理的なものである。坐禅を中心とした、どちらかというと割に静的な生活に、必要最少限の栄養を与え、しかも、特に性欲を刺激しないように工夫されたもので、また食べ物の取り扱いについても、あまり臭くもなく、不潔感も

陽光寺方丈

抱かせず、そして経済的にみても自給自足できるものとなると、中国や日本などの農耕社会においてはどうしても菜食、精進料理となるのじゃないかと思う。

このような食生活によって育成される人間が、枯淡な、植物的な性格を形成するであろうことは当然考えられることであり、これが単に禅寺のみならず、ひろく日本人の生活に浸透して来た事実を考えるとき、村松氏の所説もなるほどとうなずける。これに反して、血のしたたるような肉をジュウジュウ焼いて食べる欧米人が、濃厚でしかも動物的（活動的）なのは、これまた当然過ぎるほど当然なことである。

日頃摂取する食物のいかんは、宗教情操涵養の面にも大きなかかわりがあると思う。二十年前、前角老師が禅センターを開いた頃は、合掌するものがなかったというが、今日では実に美しく心のこもった合掌をもってお互い同士をも拝み合っている。

これについて思い起こすことがある。敗戦後逸早く民族運動をはじめた桑原鶴先生は、食事のときはいつも合掌されていた。或るとき合掌を忘れ、私の合掌したのを見てそれに気付き、「ぼくはナマ道心だから時々わすれるんだよ。これは小沢の真似だからなァ」といわれた。不思議に思った私は、「えっ、小沢君の真似ですって？」とたずねた。というのは、小沢君は桑原

先生の教えを受けている二十代の青年で、なるほど彼は食事のとき合掌していたが、それは、仏教、特に禅に造詣の深い桑原先生の影響とばかり信じ込んでいたからである。すると桑原先生は、「そうなんだよ。小沢の真似なんだ」と前置きして、こんな話をしてくれた。

「小沢と久保田は二人で自炊している。ぼくは『好きなものを食べろ。ただし、食ったものの記録をとっておけ』といって、三年ばかり彼らに食事の記録をとらせたんだがこのごろ彼らの食事は禅宗料理に非常によく似て来たんだ。そうなると不思議だねえ、自然と掌が合わさるようになって来たというんだよ。そこでぼくは考えたんだが、そういう食事をさせたら誰でも合掌できるような気持になるんじゃないか、とね……」

この着想が荒唐無稽なものでないとするならば、今日の食生活の科学的研究にはまだまだ発展の余地があるように思う。

話は横道にそれたが、翌二十八日、法戦式終了後のランチ・レセプションに出された食事もまた精進料理だった。ただ、ご飯のまずいことにおどろいた私は、「これ、カリフォルニア米ですか？」とたずねると、前角老師は、「加州米でもおいしいんですが、これは焚き方を知らないからなんです。弱火で時間をかけて焚くからこうなるんです。ここには電気が来てないので、電気釜も使えないんです」という。これを聞いて、昨日、応量器にスパゲティが盛られた謎が解けたような気がした。

注＝禅のマウンテン・センターにはまだ電気が入ってないが、ソーラー・システムにより、必要最少限の電力は得ている。電気の導入については賛否両論があるという。

八月二十七日、午後五時二十分から本則行茶

がおこなわれた。

茶堂は一番広い建物、禅堂でおこなわれた。恵玉首座には日本人の血が流れているだけあって、丸頭の美人で、日本人とよく似ており、ころもをつけた身のこなしかたもやわらかく、紹介を受けなければ日本の尼僧と見まごうほどである。これにくらべると、父母未生(みしょう)以前から椅子と家畜相手の生活に慣れて来た欧米人の所作は多少ごちごちして見える。とはいうものの、型どおりの進退は心得ており、当役はりっぱにこなせるのであるから感服せざるを得ない。在家身のままで十年、十五年と坐禅を続けているのであるからこそできるのである。

こうした修行者の中での首座であり、第一座たるには少なくとも五年にわたる参禅弁道が必要である。受戒し、得度を経て、所定の公案をパスしなくては首座になることはできない。

禅といえばまず臨済禅の洗礼を受けてきた経過を考えるとき、また、段階的進歩向上に意欲的なアメリカ人を指導するのには、公案を与えることはきわめて効果的なことであろう。ともあれ、所定の公案を通り、法要に精通し、禅僧としての起居容儀を身につけて、文字どおり大衆の第一座たるべき力量を身につけてはじめて首座となり得るのである。したがってその法戦式は正に真剣勝負である。

日本の曹洞宗の法戦式といえば今や資格を得るための通過儀礼に過ぎなくなっており、法問(問答)はサンプルを丸暗記するだけのことである。この頃は問者が下を向いて紙を見ながら法問を呈するぶざまな姿を散見するが、そのうち首座も見台上の文字を追いながら答えるようになりはせぬかと案じられる。

首座法戦式の打ち出しは十一時だったが、それより三十分も前ごろから雷鳴とどろきわたり、一時は雨が心配された。しかし、さいわい

筆者の提唱に聞き入る安居者

にも杞憂に終わり、野外ランチ・レセプションも予定どおりおこなわれたので、至祝不尽の雷鳴と受け取らざるを得なかった。またそれにふさわしく恵玉首座の出来栄えは、まことに素晴らしかった。

雷鳴とどろく中の大播上殿という予想もしなかった演出にはじまった法戦式はまことに予想外のものだった。『般若心経』以外の本則挙唱、法語、法問はすべて英語で唱えられ、法問はまさに挨拶（〝挨〟は積極的に迫ってゆくこと、〝拶〟は切り込んでゆくこと）で三十五人に及び、中にはメキシコの人がスペイン語で問い、それをアルゼンチンの人が英語に訳しての法問もあった。

日本の儀式のように荘厳一点張りではなく、法問がおもしろければ笑ったり、また、安居者を迎えに来たらしい婦人、子供の姿も多く見え、なごやいだ雰囲気のものだった。本則は『従容

録(ろく)』第八十三則「道吾看病」で、法問はそれに因んだものが多かった。一例を挙げると、

問者　Attention Shuso.(直訳すれば〝いきますよ、首座〟。これは挙唱の〝挙す！〟を訳したもの)

昨日、天心(注人名)いわく、「摂心(せっしん)いまだ終わらず」と。真相いかん。

首座　しかり、いまだ終わらず。

問者　摂心、残りいくばくぞ。

首座　摂心終わることなし。正に維摩の病のごとし。

問者　Thank you for your answer.(これは〝尊答を拝謝し奉る〟の訳)

首座　May your life go well.(これは〝珍重・万歳〟の訳)

———

問者　挙す。九旬安居修了せり。足痛み、われ家に帰るのみ。テレビを見、夕べに兎を食することあらば、その料理法いかん(頌の〝成平や天蓋い地擎(ささ)ぐ、運転や烏飛び、兎走る〟に因んだもの)。

首座　われ知らず。

問者　首座の口辺に兎の油あり。それでも知らぬか。

首座　われ汚れ放題。体中に汚れ充満せり。

問者　兎の味いかが。

首座　他と変わらず。

問者　尊答を拝謝し奉る。

首座　万歳(ばんぜい)。

———

問者　挙す。われ、手に薬あり。真偽、試してみるや否や。

首座　不要。

問者　いかに治癒するや。

首座　まず、汝自身を治癒すべし。

問者　尊答を拝謝し奉る。

首座　万歳。

――――――――

問者　挙す。かえりみるに九十日。君、主たる養成人物なり。いかなる功徳ありや。

首座　銘銘、よく自らを看護し、精進に励むことなり。

問者　終身、病める者に、いかなる提言ありや。

首座　病、治るといえども、いまだ病めるところなしといわず。

問者　尊答を拝謝し奉る。

首座　珍重・万歳。

竹篦法語・謝語等は古来慣用のものを英訳したものだった。

このあと、祝語はそれぞれ英語で述べられたが、英語の不得手な私は日本語で祝意を表した。

ここで首座の横顔を紹介すると、

Wendy Lou Egyoku（恵玉）Nakao.

ハワイ出身。父、日系二世。母ポルトガル人。ワシントン大学で一九七〇年（昭和四十五）学士号取得（東アジア史学専攻）。一九七二年修士号取得（司書学）。

一九七五年八月より、シアトルの平野老師のもとにおいて参禅、一九八三年六月、仏真寺前角老師のもとで得度。

法戦式終了後ランチ・レセプションが開かれた。樹間、思い思いの処に立ち、合掌して五観の偈を唱えるさまは実にさわやかな感じだった。メーン・テーブル以外はセルフサービスだったので、全員の食事が終わるまでには時間がかかったが、しかし、九旬安居の別れを惜しみ、迎えの家族とのなごやかな談笑にはかえってさいわいしたようだった。食後、挨拶を求められた私は次のように述べた。

「仕事を休んで九旬安居することは、今日の日本では見られないことです。皆さん方の御精

進に心から敬意を表します。また、今日の法戦式に臨み得たことを心からうれしく思い、恵玉首座の素晴らしい出来栄えを讃え、祝意を表します。

日本はアメリカに対し、禅を輸出した国でありますが、皆様方の参禅弁道の姿を見て、近い将来、日本はアメリカから禅を輸入するようになるのではないかと心配になってまいりました。

この春、日本では『長男の出家』という文芸作品が発表になりました。これは長男が出家して禅寺に入るに至る経緯と、両親の心の動きを描いたすぐれた作品で、権威のある芥川賞受賞作品であります。その中にこんな一節があります。

或る日本人がニューヨークの街で、数人の青年から『禅とは何か？』と問われました。ところがその日本人は禅を知りませんでした。しかし、知らぬといえば日本人として沽券にかかわると思ったのでしょう。わざとブロークンな英語を使いながら、〝Ｔｈｉｓ ｉｓ Ｚｅｎ Ｔｈｉｓ ｉｓ Ｚｅｎ〟といろんな物を指さして言いました。するとその中の一人が、『俺達をからかうのか』とすごんで身構えました。さいわい隣の青年がとめてくれたので事なきを得たのですが、別れて去る彼等のうしろ姿を見たとき、追っかけてゆき、住所を聞いて、あとで手紙で禅の正しい知識を教えてやればよかった、とうしろめたい気持になった、とあります」

私はさらに挨拶を続けて「これはおそらく、作者自身の偽らざる告白なのだろうと思います。著名な作家でもこの程度なのですから、一般の人は禅に対してほとんど関心を持っておりません。中には参禅する人もありますが、精々日曜日参禅会に出席する程度で、九旬安居など思いも寄らぬところであります。皆様方の九旬

安居の蓄積、相続によって、日本に禅を輸出する日の一日も早からんことを期待し、皆様方の一層の御精進をお願いします」と述べた。

次いで黒田師は、前角老師の弟であること、かつてＺＣＬＡで修行しておったとの自己紹介のあと、法戦式の法問が形式ではなく、真に心と心の触れ合いであり、そのまま仏の心に通ずるものであることを強調して称讃したあと、一段と声を張り上げ、「皆さん、どうか前角を助けてやってください。そして世界平和のため精進してください」といって合掌した。小野君は感極まって通訳が出来ない。声が出ない。言葉のわからない安居者たちは何事ならんと不審な面持ちだった。

そのとき黒田師は、“Please help Maezumi, my brother”と絶叫した。兄思いのこの一言に一同胸を打たれ、一瞬シーンとした。そのとき、思わずグラスマン徹玄師が歩み寄り、すわっている前角老師の手を取り、三人抱き合って堅い握手を交わした。ときに黒田師の“Oh My brothr!”の声に万雷の拍手が湧き起こる劇的な一場面となった。

たのしいなごやかなひと時を過ごして、午後二時に山を下ったが、ここで国際禅センターの構想についてふれておこう。前角老師には次の十指にのぼる高弟がおり、それぞれの地に支部センターを設けて活動している。

一、バーナード・グラスマン・徹玄＝ニューヨーク州ヤンカース市、同事山禅真寺住職。

二、デニス・メルツェル・玄法＝メーン州バーハーバー、玉鳳山法真寺副住職。外にイギリスに三ヵ所、オランダ、ポーランドにグループを持ち、安居・摂心を通して指導している。

三、ユーディット・ベイ・澄禅（女医）＝オレゴン州ポートランド、幼児虐待保護センター経営。

四、ジョン・ローリー・大道＝ニューヨーク州マウント・トレンパー、天香山道真寺副住職。
五、ジョン・サンダーソン・徹心＝メキシコ市禅センター・ディレクター。
六、ゲーリー・ヴィック・獅心＝カリフォルニア州サンジエゴ。
七、スーザン・パルマー・妙融＝ワシントンD・C・周辺に禅堂物色中。
八、ピーター・グレゴリー・覚禅＝イリノイ大学教授・クロダインスティチュートのディレクター。
九、フレッド・アンチェッタ・実道＝ZCLAマウンテン・センター、道雲山陽光寺副住職。
十、ピーター・マティソン・無量＝ニューヨーク州ロングアイランド。

いま、アメリカでは各地において禅が強く求められている。それだけに正伝の仏法、禅を正しく伝えることは容易ならぬことであり、その責務を痛感した前角老師はここに国際禅堂の創設を決意したのである。

その必要性を列記すると、

一、各地支部センター（末寺）の成長発展に伴い、宗旨、清規、法式、その他修行並びに運営大綱の統一をはかる根本道場。
二、現在すでに十四ヵ国よりの安居修行者を擁しており、さらに門戸を広く開放し、正伝の仏法を挙揚する国際道場。
三、夏冬二回の九旬安居を中軸とする年間を通じての宗旨と行持の参究道場。
四、出家・在家の指導者養成道場。
五、伝統的な伽藍配置及び如法の僧堂様式等を親しく熟知させる道場。但し、建物の構造仕上げについては、外観は和様とするも、内部は和洋折衷とする。

大体以上に要約される。そのかみ、道元禅師が入宋して正伝の仏法をわが国に将来され、直

接その教えを受けられた義价禅師が入宋し、彼の地の名山古刹を歴訪して五山十刹図を伝来し、永平寺の諸堂を整備するとともに諸清規を制定し、永平三祖となられたが、いま、アメリカには正伝の仏法の種子が蒔かれたときであり、この機にこそ義价禅師の勝躅に学び、アメリカに正伝の仏法の根を張るべく国際禅堂の創設は喫緊不可欠の大事と思われる。

さいわい、道雲山陽光寺の裏山に広大な適地があり、故・秦慧玉禅師により白梅山天真寺と命名されている。ただ、これが実現には莫大な資金が必要であり、日本各界の協力支援が望まれる。

アメリカに行っておどろいたことだが、クルマの先進国アメリカで一番目につくのは、日本車である。また、ロサンゼルスや、特にニューヨークのどまん中で、日本企業の広告ほど目につくものはなく、〝なるほどこれではアメリカもいらだつわけだ〟と経済摩擦の深刻さにいまさら感じ入った次第である。アメリカ側に財的援助を求めることは、木に縁って魚を求めるようなものであり、いまこそ経済大国日本が仏心を輸出する拠点をつくることに努力すべきときであろう。

物の輸出はトラブルのもとだが、仏心の輸出は友好和平の道である。

こうした感懐を抱きロサンゼルスのZCLA仏真寺に戻り、ようやくくつろげるかと思っていたら、二、三十人のロサンゼルス在住のメンバーがやって来た。歓迎の意をこめてのミーティングであろうが、いろいろ真剣な質疑がおこなわれ、時の経過も忘れるほどだった。

或る一婦人は握手ののち名刺を渡してくれたが、その裏面には“To Sato-Roshi,I very much appreciate your visit and your moving talk today. Thank you, Jakunin”と書かれてあっ

た。

『甘露門』の精神実践
NYに禅真寺開くグラスマン徹玄氏

禅では悟道の機縁を大事にするが、それと同じように、異文化の土壌に育った者の入信、禅との出会いは何であったのか。それをさぐることはこのたび課せられた重要な課題の一つであるように思う。

私はかねてからバーナード・グラスマン・徹玄師にそれを尋ねてみたいと考えていた。というのは、哲学博士の学位を持つ数学者である彼は二十五年の弁道であり、前角老師の上足である。今から十年前瑞世に来日されたとき、大本山総持寺で初相見して以来、その後二、三度会っているものの、言葉の通ずる機会を得なかった。

さいわい、道雲山陽光寺で相会うことができ、しかも同道してニューヨークに飛び、彼の主管する禅真寺に拝登する機会を得た。ニューヨークからシカゴに飛ぶ機内で、石川光正君の通訳によって知り得たことを述べてみよう。

彼は一九三九年、ニューヨークに生まれた。今年四十九歳である。彼は両親とは違って宗教心が厚く、神についていろいろ学んだが、どうも飽き足らず、自然に仏教書、特に禅籍に目を通すようになり、手当たり次第に読んだ。その結果、禅にもっとも深い関心を持つようになった。

彼は大学卒業のとき、友人に語った。自分は、

一、禅の僧堂に入って修行する。
二、イスラエルに行って住む（彼はユダヤ系）。
三、ニューヨークで乞食をする。

のうちどれか一つを選ぶであろう、と。

大学を卒業して、共同体生活に興味を持って

いた彼は、二十三歳のときイスラエルに行き、キブツに入ったが、どうも性に合わないことを知って一年で帰り、ガレージに小さな禅堂を造って、ただ独り坐禅にはげんだ。

ニューヨークの大学で宇宙技術を専攻した彼は、ロサンゼルスのダグラス社に入社し、夜はUCLA（ロス大学カリフォルニア分校）において数学を学び、三十一歳のとき学位を得ている。

二十五歳から二十六歳にかけてのころ、ロサンゼルス禅宗寺に赴き指導を受けたが、言葉がよく通じないため、期待した進展は得られなかった。ところがその後間もなく〝ロサンゼルス哲学研究会〟主催による安谷白雲老師講演会で前角老師が通訳されて、はじめて英語で禅の話を聞き、道の開けるのを感じた。確かに海外布教には語学力が決定的な要素である。

会が終わって、前角師と話し合い、数日後に坐禅に訪れ、そのとき（一九六七年＝昭和四十二年）会ったのが黒田武志師だったという。爾来参禅を続けて来た。一九七〇年（昭和四十五年）三十一歳、四月八日に得度した。この年は

彼にとってラッキーな年で、六月には哲学博士の学位を得、またはじめて渡米された苧坂光龍老師について無字を通った。

その頃は見性にこだわっており、他人にも勧めていたが、摂心を重ねるにつれ、そのこだわりも消え、数年後、世界中が飢えていることに気付き、『甘露門』によくなじんだというのであった。『甘露門』といえば施食会のときに読む、先亡の精霊に施すお経ぐらいにしか思っていなかった私は、〝さすがは！〟とその卓見におどろいた。

一九七〇年、三十九歳のとき、ニューヨークでラジオの宗教番組のスポンサー、レックスさんに頼まれて、レックスさんとの対談を放送した。彼の人柄に惚れ込んだレックスさんは、彼に無断で、一週後の週末に坐禅の会を催すと放送した。これが機縁で、彼を中心とする坐禅グループがニューヨークに誕生した。彼はその頃、ロサンゼルスでも中心的役割を果たしていたが後進に道をゆずり、このラジオ放送を機に生まれ故郷のニューヨークに帰ることになった。前角老師は、「今後二年間はあまり訪問しない。ニューヨークの風土に即した自由な活動をしてほしい」と要請したという。

いまアメリカ中で家のない人は二百万人もおり、子供の平均年齢は六歳であるという。そしてグラスマン徹玄師の主管する禅真寺の所在地ヤンカース市には、貧しい、家のない人が非常に多く、それらの人びとはシェルター（体育館のようなところ）に泊まっており、子供の通学には二時間も要するような状態だが、これが解決策は何等講じられていない。そこで禅真寺では、設計工務の会社をつくり、住民を指導して住民自らの手で家を造らせている。こうして家を支えるだけでなく、職業訓練をし、子供の保育を受け持ち、また、月に一度施食をおこなっ

ており、二百五十人分ぐらいの食事を家のない人びとに施すなど、住民に自活の道を講じている。こうした活動は市当局やキリスト教の人たちの協力するところとなり、アメリカでもモデルケースとして広く注目されているとのことである。

これは『甘露門』を主軸とした慈悲行で、禅真寺のメンバーは『甘露門』「五如来宝号招請陀羅尼」にもとづいて五つのグループに分けられ、それぞれ活躍している。

禅真寺のメンバーは百五十人、居住者は二十五人で、これらの活動のための収入源として徹玄師は六年前、ベーカリーを設立した。これは徹玄師のヘレン夫人が主任で年間九十万ドルの売り上げがある。来年はアイスクリームもつくり、百万ドルを突破したいと意気込んでいる。

年一回、十日間のセミナーをおこなう。今年は「発菩提心」をテーマとして六十人が参加したという。ほかに一週間の勉強会、年二回一週間摂心、年四回の週末摂心、月一回（第一土曜日）は一日坐るというふうに、本来の行持もきちんと行じられている。

キリスト教会を禅堂に改造

「徳は孤ならず、必ず隣あり」というが、禅真寺の隣にキリスト教会があり、その教会の古い礼拝堂を開放するから禅堂に使ってはという申し入れがあり、近く内部改造して禅堂に生まれかわることであろう。キリスト像も仏像もなくていいじゃないかといっているが、東西霊性交流の殿堂として注目を集めると思われる。

夜はここでもミーティングが開かれたが、ここで善光寺海外留学僧派遣育英会の第四次派遣の越石君に、理事長の黒田方丈から辞令の交付がおこなわれた。越石君もニューヨークの生活にだいぶ慣れた様子だった。

垣間見る先駆者の心
すがすがしい道真寺

現在、全米の仏教グループは四、五百とか、またはそれ以上ともいわれているが、トレンパーの道真寺はもっとも整備された禅道場である。

ニューヨークの中心部からハドソン河に沿ってキングストンまで百二十キロばかり北上するのだが、このときクルマの中で、五十数年前、旧制中学で習った英語のリーダーの一節がよみがえり、思わず口ずさんだ。ワシントン・アービングの『スケッチブック』の一節じゃなかったかと思う。"Whoever has made a voyage up the Hudson must remember the Casskle moutain

そのハドソンに沿って遡行しているのだと思うと、なんだか夢の国に出かけるような気分になった。

キングストンから西へ三十キロも走ると、トレンパー山が見えて来て、山を見ながらクルマを飛ばしていると、道真寺に到着した。ニューヨークから二時間の距離である。

先述と同様に、六十年前に建てられたキリスト教修道院が今から八年前、道真寺の入手するところとなった。百五十人は起居できるというから、なかなかりっぱな禅道場である。境内地は十四万坪というから、日本の本山クラスも顔負けの広大さである。ここの主管はジョン・ローリー大道師。昨年瑞世(ずいせ)に来日されたとき会っており、またここは私の徒弟采川道昭が修行していたところなので、はじめての拝登ではあるが、親近感があった。

この寺で修行僧として黒衣をまとって修行しているのは数人だが、在家のままの修行者が二十数人おり、グレーのユニホームを着けている。

ここのメンバーになるには、まず旦過寮で一日坐ることが課せられており、一年間は〝生徒〟と呼ばれ、この間にお経を習ったり、必要な所作を身につけたりする。そして一年後、本人の希望により受戒して安名をいただく。そしてさらに一年以上沙弥の位にあって、そののちに得度ということになる。

修行の在り方については、ロサンゼルスと同様、夏冬九旬の安居、三ヵ月ずつ二回の解制期間がある。毎月摂心があり、修行者の機根に応じて公案が与えられ、また只管打坐が指導されていることはこれまたロサンゼルスの場合と同じだが、ここでは特に禅アートを重視し、坐禅の研究会の外に、茶、生け花、墨絵、空手などに関心のある人びとに研修の機会を与え、坐禅を指導している。こうして集まる人たちの寄付金や会費などがこの寺の経済を支えているという。またここでは雑誌『マウンティン・レコード』その他の出版物を通して、布教活動を展開している。残念ながらここには一時間少々しか足をとどめることができず、心残りだったが、一同の門送を受けて去るときは、最後の日程をこなし得た安堵感もあってか、トレンパーの山の空気のように澄んだすがすがしい気分だった。

"Whoever has made a voyage up the Hudson must remember the mt. Trenper Doshinji"

誰か第二のワシントン・アービングが出て、こうした書き出しで道真寺物語を書かないだろうか。いや、きっと誰かが書くことであろう。なぜなら、ロサンゼルス仏真寺を源とした禅の一河は、いまこの地を経て、ヨーロッパにまで及ぶ大河の流れを形成しようとしているからである。五十年後、この地を訪れる人は、今日の私と同じように口ずさむであろう。

思えば前角老師の力量と功績はまことに大なるものである。しかし、世の通弊として、予言者世にいれられず、先覚者報われずで、その道は想像以上にけわしい。

ＺＣＬＡ仏真寺の元旦は、寺から十キロほどの距離にある日系人墓地エバーグリーンに出かけ、在留邦人物故者慰霊塔に額づき、また、アメリカに対し日系人の比類なき忠誠心を示し、対日感情を大きく変えさせたイタリア戦線における二世部隊の英霊に供養し、併せてアメリカに禅をもたらした先駆者の一人、千崎如幻老師の墓前に諷経することからはじまる。この墓参はＺＣＬＡの創立と同時にはじめられ、毎年欠かさずおこなわれてきたという。先駆者前角師の心を垣間見ることができるような気がする。

前角老師の今後一層の御精進と法身堅固（ほっしんけんご）、国際禅堂創設の大願成就を祈念して、ペンを置く。

＝おわり＝

道真寺本堂にて心経読誦

くらしの中で読む『正法眼蔵』

王索仙陀婆（おうさくせんだば）の巻　その一

成興寺住職　小倉玄照

私は今、中国山脈の分水嶺にある過疎の山村に生活しています。人口は、六千人少々。面積は、岡山県では一番広い町ですから、つまりは、山林ばかりの町と申してよいでしょう。

私の寺は、その町の中心地にあります。檀家は百軒たらず。とても、妻子を養いきれるような寺ではありません。

先代の住職は、私の実父ですが、農地解放で失った百俵の年貢米を何とかカバーしなければ、子弟の教育もままならぬ――と、地の利を活かして境内に保育園を開設しました。昭和二十三年のことです。農村には、子供がいっぱいいました。何しろ、私の町の当時の人口は、優に一万人を越えていたのです。

保育園の経営にも紆余曲折（うよきょくせつ）がありました。しかし、先住亡き後は、私と家内でその経営を引き継いで、今も悪戦苦闘しています。時々、禅寺の和尚なのか、保育園の園長なのか、どっち

が本務なのか、自分でもわからなくなるような日常を送っているわけです。

それでも、道元禅師の教えというのは、そんな俗情ふんぷんとした生活をしている私どものバックボーンになっています。中々じっくりと机に向かう閑暇もないのですが、折々に『正法眼蔵』を繙きながら、子育ての原点を考えてみたり、太平の世の行く末を案じたりするのです。

まことに気ままな『正法眼蔵』の読み方です。出家に徹し、只管打坐の生涯を送られた道元禅師の生き方を偲ぶ時、誤読のおそれが多分にあるような不遜な『正法眼蔵』に対する接し方です。しかし、あまりに観念的というか、高踏的というか、生活からかけ離れた眼蔵解釈があふれている現代の状況を思う時、何とか田舎和尚が一石を投じてみたいという気にもなるのです。

さて、題して「くらしの中で読む『正法眼蔵』」。何の巻から始めるか。これも私の気分のままに「王索仙陀婆」。

あまりなじみのない巻かもしれません。奥書には、寛元三年（一二四五）十月二十三日、越前の大仏寺にありて衆に示す、とあります。翌寛元四年には、大仏寺は、永平寺と名を改めます。そういう意味では、道元禅師にとって一つの節目となった巻と言えます。

ともあれ、早速に拝読して参りましょう。

仙陀婆とは何か

〈本文〉

有句無句、如藤如樹、餧驢餧馬、透水透雲、すでに恁麼なるゆゑに。

大般涅槃経中、世尊道、「譬へば、大王の諸群臣に、仙陀婆来と告ぐるが如し。仙陀婆とは、一名にして四実あり。一には塩、二には器、三には水、四には馬。是の如くの四物、共に同じ

く一名なり。有智の臣は、善くこの名を知る。もし王、洗ふの時に索仙陀婆すれば、すなはち水を奉る。もし王、食する時に索仙陀婆すれば、すなはち塩を奉る。食し已りて漿を飲まんと欲ふ時、索仙陀婆すれば、すなはち器を奉る。もし王、遊ばんと欲ひ、索仙陀婆すればすなはち馬を奉る。是の如く智臣、善く大王の四種の密語を解す。」

この王索仙陀婆、ならびに臣奉仙陀婆、きたれることひさし、法服とおなじくつたはれり。

世尊すでにまぬかれず挙拈したまふゆゑに、児孫しげく挙拈せり。疑著すらくは、世尊と同参したれるは、仙陀婆を履践とせり。世尊と不同参ならば、更二買草鞋一行脚進一歩始得。すでに仏祖屋裏の仙陀婆ひそかに漏泄して、大王家裏に仙陀婆あり。」

〈現代語私訳〉

「言葉で有といい無というが、それは藤のごとく樹のごとくというようなものか。驢馬を飼い、馬にえさくらわすは、水を透かしてみたり

雲を透かしてみるようなものか。」

すでにこのように言葉と実態はなかなかぴたりといかないからであろうか、『大般涅槃経』の中で、世尊も仰せになっている。

「たとえば、大王が並びいる臣たちに〝仙陀婆を持て〟と告げるようなものである。仙陀婆というのは、一つの名称に四種の実態を秘めているのである。一つには塩、二つには器、三つには水、四つには馬である。このような四つのものが、みな同じ一つの名称なのである。智慧のある臣は、よくこの区別がつくのである。もし王が顔や手を洗いたい時に〝仙陀婆を持て〟と命ずれば、すぐに水をさしあげる。もし王が食事のおり仙陀婆を求むれば、すぐさま塩を用意する。もし王が食事をすまし、飲みものをめしあがろうとするときに、仙陀婆を持て、と言えば、すぐに器をたてまつる。もし王がどこかへ出かけようとするときに、仙陀婆を、と求めるならば、即座に馬の準備をする。このように智慧ある臣は、大王のことばに秘められた四種類の内容をよく聞きわけるのである。」

この、王が仙陀婆を索め、臣が仙陀婆を奉るという故事は、ずっと昔から、法服とともに伝えられているのである。世尊がすでにさけることなくそれをとりあげ問題として語っているのだから、その流れを汲む法孫もまたしばしばそれをとりあげ問題としている。そこでいささか思案してみるに、世尊を慕い、世尊の教えのままに修行して来た者たちはみな、この仙陀婆の消息を臍おちすべく修行して来たのである。もし世尊とは異なる修行をするというのならば、さらに草鞋を買って行脚に出発し、一歩を進めてみよ、そのことがはじめて臍おちするだろう。そういう意味からするなら、もともとは仏祖の道場で大切にされていた仙陀婆が、いつのまにか俗界に漏れ伝えられて大王の宮廷に仙陀婆の

語があるという事態になったとも言えるのである。

ことばと事物

保育園は、〇才児から小学校入学までの幅広い年令層の子どもを預かっています。まだ這いは這いも出来ない児が、よちよち歩き始め、やがてことばをしゃべるようになる――その成長の過程をつぶさに観察できる立場に私どもはいるわけです。

乳児から幼児へと、子どもが成長していく中で、現代の親たちが一番感心を抱いているのは、ことばの問題。もし同年令の子どもがかたことをしゃべっているのに、我が子が言葉らしきものを少しも発しない場合の親の心配は、想像を絶します。もしかすると脳に微細な傷でもありはしないか、と大学病院に脳波を調べに行ったりする親も珍しくはありません。

我が子が文字を読んだり書いたりし始めた時の親の喜びも大変なようです。もちろん、親はそのために幼い時から絵本を与えたり、ドリルを与えたり、はたから見ているとおかしいほどの気配りをします。

私どもが幼かった頃は、文字や数字に対してもっとおおらかであったように記憶します。小学校に入学して、初めてカタカナを読み、数字を習う者が殆んどだったのです。

おかしな現象です。たしかに『新約聖書』ヨハネ伝の冒頭には

「始めにことばがあった。ことばは神と共にあった。ことばは神であった。」

とあります。しかし、これは造物主によって天地が創造されたとするキリスト教特有の考え方と申した方がよいでしょう。なぜならことば（概念）に合わせて万物が造られたとすれば、ことばは存在の根拠と言えるものになるからで

す。

仏教では、造物主を説きません。森羅万象は、何物かによって造られたものではなくてそこにそのまま存在していたのです。その一々に名称を付したのは人間です。存在があって、しかる後、ことばが生まれたのです。仏教的世界観からすれば、ことばはなくても萬物は存在し得るのです。むしろ、なまじことばを修得したばかりに、私ども人間は、抽象的な言葉の世界と、現実の具体的世界との分裂に苦しまなければならないようなはめに陥ってしまったとするのが仏教的な考え方です。

発達した機械文明と分業による大量生産が社会に定着したため、私どもはおしなべて生活体験の幅が狭くなりました。ところが、情報化社会と言われるほどですから、言葉だけは結構豊かなのです。テレビやラジオ等によって、体験の裏づけのない語彙をあたかも自らが体験の中から身につけたと錯覚しつつどんどん修得しているからです。

有句無句と恁麼

「王索仙陀婆」巻は、ことばと行動の問題にからみながら、人と人とのコミュニケーションの理想的ありようを語っている巻だと申してよいでしょう。

まず、冒頭のこの一節は、「王索仙陀婆」という珍しいことばの意味する内容を明らかにしています。それは、『大般涅槃経』巻九、如来性品に説く譬喩が出典の語だとした上で、仙陀婆(Saindhava)という一つの語に、四種の意味を内包した語を自由自在に聞きわける臣のことを語りつつ、仏道修行が抽象的な概念によって振りまわされるものであってはならないことを強調しています。

冒頭の「有句無句」は、四句分別のことを端

的に表現しています。存在物を四種に分けて考察することが仏教では古くから行われていたのです。例えば、「有である」（肯定）「無である」（否定）「有であって無である」（複肯定）「有でもなく無でもない」（複否定）という四句の命題を立てて考えてみるわけです。つまり、ここでは四句の内、「有句無句」という最初の二つの命題を示すことによって、存在物のあらゆるありようを問題にしていると考えてよいでしょう。抽象的に「有」とか「無」とか論じてみても、結局、存在は「藤」だとか「樹」だとかいう具体的なものを離れてはありえないのだ、ということです。

また、驢馬を飼ったり、馬に餌をやったりという具体的な行為と、水を透かしてみたり、雲を透かしてみるというかなり抽象度の高い行為とは、深く関わっているというのです。

「恁麼」という語は、禅門で好んで使われるのですが、これは、ことばが具体から遊離して概念化してしまうのを嫌うからです。「恁麼」は、中国は唐代・宋代の俗語です。その、この、そんな、こんな、このように、等という意味です。一緒に行動している時に、「それ」とか「これ」とか言えば、すぐに通じます。しかし、文字にして「これ」とか「それ」とか記すと中々わからなくなってしまいます。『正法眼蔵』の中にも「恁麼」の語はしばしば出て来ます。その都度、私どもがチンプンカンプンになるのは、私どもが頭の中で、抽象的に道元禅師の言われるところを理解しようとするからなのです。

言葉と万物の実態が中々ぴたりと一致しない、むしろ両者はとかくすると遊離していってしまう――そのことに対する道元禅師の危機感を「恁麼」という語によって示そうとされているのだと受けとめたらまず間違いないところだと私は思っています。

（この項つづく）

インド留学記

その7

出版記念パーティ(1)

東方学院講師
駒沢大学講師
阿部慈園

1

一般の学術書の表紙には、本のタイトルと著者の名前がまずきて、それに出版社あるいは研究機関の名称がつづくのがつねですが、それだけでは無味乾燥にすぎると思い、少しく彩(いろどり)を添えることにしました。

はじめ、カヴァー・カットには好きな花の「クリシュナ・カマル」をと思いましたが、その絵あるいは写真が入手できなくて、「ブラフマ・カマル」(邦名・月下美人)にすることにしました。

アメリカから留学していたジム・レイン(現マカレスター大学助教授)を通して、カナダ人のアーティスト、ジャック・アンダースンに、そのイラストを頼みました。かれは一つ返事で「オーケー」してくれました。しばらくして、「ブラフマ・カマル」の草案がとどけられ、それをバンダールカル研究所のプレスに渡しました。いわば、汗顔ものの小著に、かれは「花」を添えてくれたのでした。

あとで、「謝礼を払いたい」といっても、
「そんなものはいらない。ぜひというのなら、家内とともに食事を招待して欲しい」
というだけです。一夕、わたくしはデッカン・ジムカーナのレストランにかれら二人を招きました。ミセス・アンダースンは、サンスクリット学者で、かれは奥さんのインド留学についてきたのでした。長身にして細身、飄飄として、まさに鶴のような男でした。

カヴァーの裏には、故秦慧玉禅師の詩の一句「渡水看花」を引用させていただきました。それに、"Over the Ocean, See the Flower"の英訳を添えました。

ちなみに、出版費用は、一八〇ページ、一、〇〇〇コピーで一一、九七〇ルピーでした。当時一ルピーは約三〇円でしたから、三六万円ほどになります。しかし、一年間のプーナ滞在費とその間二度の日本とインドを往復した渡航費を加えますと、出版に用した総額は二〇〇万円をゆうに越えていました。

2

研究所の所長R・N・ダンデーカル先生から身にあまる「序文」(Foreward)をいただきました。一九八一年二月四日付の序文の最終校正がすんだころ、事務長のB・N・パランズペー氏は、

「お世話になった先生方や友人たち、あるいは研究所の職員たちを招いて、出版記念パーティーを開いたらどうか。ただし、費用はお前もちで。二〇〇ルピーもわたせば、わしがすべてとりしきってやるよ」

といいました。

それはいい考えだと思い、さっそくかれの指示にしたがって、パーティーの準備にとりかかりました。招待状を作成して、まず、メイン・

ゲストであるP・V・パパット先生ご夫妻をたずねました。先生は大変喜んでくださいました。V・V・ゴーカレー先生や、プーナ大学サンスクリット科の主だった先生方のもとへも足を運んで、来臨をたのみました。

サンスクリット科のヘッドのS・D・ジョーシ先生に、お車代にあたる「リキシャ・チャージ」(たしか一〇ルピーだったと思う)を添えて、招待の意を述べましたところ、

「こんなものはいらないよ」

と、リキシャ代をつっかえすのです。

「いや、日本の習慣では偉い先生をお招きするとき、お車代をつけますので、どうかお受け取りください」

といいましたら、やっと受け取ってくれました。

3

一九八一年二月二五日、長年住みなれた研究のゲストハウスのメインホールで、出版記念パーティーが開かれました。約七〇名のパーティーとなりました。

開式の言葉が簡単にあったのち、わたくしは謝辞を呈するために立ちあがりました。

Respected Ladies and Gentlemen,
and my dear Friends ;

I am very glad for your kind presence today. When I first came to Poona, Nov. of 1974, I could not even conceive of the completion of my Ph.D. work, neither dream of its publication, because, at that time, in fact, I could not speak even one full sentence of English. Due to Prof. Bapat's solicitous guidance, however, and the warm encouragement of all of you here, I have come to this good day.

Having come over the sea to India, I am sure, I have seen this Brahma-Kamal Flower. My sincere hope is that between Poona and Japan, I might become one small bridge in the field of Indology.

Thank you.

〔尊敬する紳士淑女の皆さん、

そして親愛なる友人諸君。

皆さま方の本日のご来臨を、大変うれしく思います。わたくしは、一九七四年一一月に初めてプーナにやってまいりましたが、そのときわたくしの博士(Ph・D)論文の完成はおろか、その出版まで夢みることすらありませんでした。何となれば、実際、当時のわたくしは英語の一文すらを充分に話すことができなかったからです。しかしながら、バパット先生の熱心なご指導のおかげで、また、ここにいらっしゃいます皆さま方の暖かいはげましのおかげで、今日の良き日を迎えることができました。

海を渡ってインドへやってきまして、まさにこの「ブラフマ・カマル」という花（小著を掲げながら）を看ることができました。わたくしの心からなる希いは、インド学の分野でプーナと日本をかけわたす一つの小さな橋になることができればということであります。

ありがとうございました〕

前夜、何回も挨拶文を声を出して練習したにもかかわらず、スピーチの途中、言葉がとぎれました。論文完成に費やした七年の星霜が、またインドの青春を燃やし尽くしたという感激が、思わずわたくしの目頭（めがしら）を熱くしたのでした。

（つづく）

本尊さまがどこかに行ってしまった

釣学院住職
第二回海外留学僧
河内義宣

「他流には名号よりは絵像、絵像よりは木像というなり。当流には木像よりは絵像、絵像よりは名号というなり。」

前掲の文は『蓮如上人御一代記聞書』に出てくるお言葉ですが、私達は心情的、感覚的に名号が書かれていても、それほどに思わないが、すばらしい御尊像がおまつりされていますと自然に手があわさり礼拝もするということになるのが一般的でありましょう。しかし、それではいけないという事なのでありましょう。逆に言えば、御尊像がなくても名号があったら合掌礼拝、お念仏が唱えられなくてはいけないし、たとえ名号の掛軸がなくてもお念仏が唱えられなくてはいけないと示されているのであります。

この事は私達が合掌し礼拝する対象を外にばかり見ていてはいけない、合掌し礼拝し、お念仏し、あるいは読経する、そこにこそ仏さまがいるではないか、そこを直視せよと言われているように思われますがどうでしょうか。

ところで、この話しを持ち出したのは、ニュ

ーヨーク・ゼンセンター（Z・C・N・Y）でおもしろい事があったからであります。

昭和六十一年九月一日、私は初めてZ・C・N・Yを訪ねました。それまで坐禅や読経などの行持はリヴァデールにある禅真寺において行われていたのですが、その直前からヨンカーズにあるベーカリー（パン工場）の三階が本堂兼坐禅堂として使われるようになっておりました。もちろん日本のお寺のように須弥壇があったり、坐禅堂があったりするわけでなく、壁をブチ抜いて部屋を広くしただけのものでした。ハドソン川を見渡せる窓際に粗末な壇が設けられ仏像が一体安置されており、そこで四時の坐禅、三時の勤行が行われるわけですが、ある日、会員が持ち込んできた自然木のT字形になったものが祭壇にとってかわりました。凸凹だらけの自然木ですから仏像をおくにも、その他三具足をおくにも、よほど注意しないと倒れてしまうといったものでしたが、そうこうしているうちに釈迦牟尼仏の御尊像がかたずけられてしまい、メンバー諸氏は何もおまつりしてない自然木の祭壇に向かって合掌、礼拝、読経することになったのでした。

この事に関して会員の中で疑論らしい疑論がほとんど聞かれなかったのには驚きました。一つにはパン工場の方が猛烈に忙しく、特に、十一月の感謝祭、十二月のクリスマスに向かっては、その労働（作務）こそがベーカリー禅堂の臘八摂心であるといったものでしたから、そんな事を話している余裕がなかった事がありましょう。また一つには前に紹介した『英訳甘露門』にグラスマン徹玄先生の考えもあり、偶像崇拝を否定する人達にも仏教が容認、受用できるようにということで、最初の奉請三宝の中にBeing One With All Formless Forms Throughout Space and Time!!という言葉が

挿入されたこともあり、更にはヒッピーの人達にかつてもてはやされた『金剛経、Diamond Sūtra』は禅を志すほどの人達はたいがい目を通しており、経典の中に、

「およそあらゆる相は皆これ虚妄なり、もし諸相は相に非ずと見るときは、すなわち如来を見る」

「菩薩はまさに一切の相を離れて阿褥多羅三藐三菩提の心を発すべきなり」

「如来はまさに、諸相を具足せるを以て見るべからず」

などの字句があり、最後には、

「もし色を以てわれを見
音声を以てわれを求むるときは
この人は邪道を行ずるもの、
如来を見ること能わざるなり」

という有名な四句偈のあることを知悉しており、問題にならなかったのかも知れない。中には『大般若経、The Large Sūtra on Perfect Wisdom』等にも目をとおしている青年がいたりで、アメリカの禅仏教というものが非常に知的な要素が強いなと感じたことでありました。

釈尊以来、印度、中国、日本等、それぞれの国民性にもとづいて仏教文化をつくりあげてきましたが、これからアメリカがどんな仏教文化をつくりあげてゆくか、たいへん興味があるところです。

インド留学記

その6

闇の中での宗教体験

東方研究会
研究嘱託
保坂俊司

闇は怖いものと相場はきまっている。田舎育ちのわたしは、夜になると自宅のがらんとした闇の空間、特にその闇の深い奥座敷の板戸を開けるのも憚ったものだ。

しかし、子供のころ体験した何とも表現できない闇への恐怖感は、いつの間にかわたしのなかから消え失せていた。

それは、田舎の道にも例外なく街燈が付き、冥界から湧き出たような闇の空間にめったにおめにかかれなくなったからかもしれないし、闇というものに何の価値を認めていなかったからであろう。

ところが、一切の光をもたない空間がインドの生活の中では、未だにいたるところにあり、しかもわたしが子供のころから抱いていた闇への恐怖感とは一味異なった面を、この闇はわたしに示したのである。わたしはひさしぶりに再会したこの闇がなんだかとても懐かしく、しか

も暖かくいい知れぬ玄妙さを感じずにはいられなかった。

もちろん、わたしはその闇が「街燈が整備されていないというような現実的な事情だけで今もインドに残された言わば、インドの前近代性を象徴しているといった意味での存在」というような消極的な意味で、この闇を懐かしく感じたわけではない。

その闇はわたしにインドという宗教大国の、深い精神性の源を示しているように感じられてならなかった。

わたしはインド滞在中、よくあちこち歩き周りヒンドゥー教のお寺や、イスラーム教のモスク、シーク教のグルドワラなどを尋ねた。

そして、これらの施設の片隅にすわって、お参りにくる人々の姿を眺めるという妙な趣味を持っていた。最初のころは、単なるもの珍しさでみていたのであるが、ある時から、彼等の聖域において示す独特の雰囲気が、妙に気に掛かりだした。具体的には、その人々の眼の中に、何とも言えない静けさがはっきりと現れていたのである。

それは一般的な解釈をすれば、彼等の神に対する心からの祈りのあらわれであったのだろうし、自我の非常に強いインド人が、唯一その強烈な自我を放下したその心のうつろなのかもしれない。彼等の目は、どれも深く澄んでいた。しかし、その闇は決して恐怖を含んだものではなかった。自己放下したその虚脱感と陶酔感、あるいは神への畏敬の念が、瞳の中に宿っていたからである。わたしはこの澄みきった黒い瞳の中に、まったく光を持たない闇の静けさを感じたのであった。わたしは、それに惹かれ、その闇の正体をつきとめたいと思った。

もちろん、この彼等の瞳の闇は、いわゆる啓蒙される以前の人間の持つ、迷蒙から湧き出し

たものではない。そんな、近代西洋の薄っぺらな人間理解では、理解しえない静けさと深さをそれはたたえていた。わたしはそれをどうしても知りたかった。しかし、なかなか理解しえなかった。ところが、或る日わたしはこのインド的闇を理解する切っ掛けを摑む体験を持った。

その体験とは、友人とデリーから二〇〇キロほど離れたマトゥラーのクリシュナ神の生誕地を訪れた時のことである。その時、その友人と真夜中に寺の中を案内してもらい、大変貴重な体験をした。そうはいっても、幽霊を見たとか人玉（インドでも人玉はいて、大変恐れられている）を見たとかいうのではない。

闇の暖かさ、闇の豊かさを直感的に感ずることができたのである。それは、全くの闇夜で明かり一つない境内に、立たされた時のことであ

った。いくら目を凝らしても目の前に居るはずの友も、また昼間あれほどにぎやいだ沿道も、巨大な寺の建物も一切感じられない世界であった。闇は静かに私をつつみ全く他の存在を感じさせなかった。わたしはその時、非常な恐怖を一瞬感じた。なぜなら自らの身体の一部であるはずの手や足までも、全く目にはいらなかったからである。心の中に火のような恐怖がまるで矢のように走って目の前を真っ白に変えた。動揺した心の現れである。しかし、その時、わたしは自らの内面に同じような闇の存在を感じた。そう思った瞬間に、恐怖心は消えむしろ闇の中の自分が全く意識から消え失せたかのようになった。つまり、外の闇と内に潜む闇とが、わたしの身体をとおして混じりあっていたのである。その時わたしは妙な陶酔感にひたり、肉体を意識しない闇の世界を掛け巡っていた。なにか非常にゆったりとして落ち着いた心持ちが、わたしのあたまの中にひろがった。そこは、時間も、空間もましてや人間社会のしがらみもない自分だけの無限の世界である。まるで酔ったときのようでもあるが、しかし頭は妙にすっきりしているのである。わたしは、これがインドの人々の宗教的世界なのではないか、と直感した。もちろん、なんの根拠もないのだがその時の体験が、その後のわたしのインド宗教理解の上で何がしかの意義をもっていることは否定できない。わたしは、インドの人々のあの妙な落ち着きは、きっとこの闇の世界から来ているのではないかといまでも思っている。

しかし、その陶酔感を破ったのは、友の差し出したライターのあかりであった。

驚くほどに小さいその光が、わたしを闇の世界から引きずり出したのであった。

（つづく）

学位授与式を終えて

浄土宗教師修練道場
第二回海外留学僧　安井隆同

おかげさまで、この程、平成元年一月二十四日、カルカッタ大学より私は、博士号（Ph.D.）を授与されました。これは、私の昭和五十八年一月から昭和六十三年一月までの、インドでの五年間に亘る、原始佛教哲学の研究を纏めた学位論文、『THEORY OF SOUL IN THERAVĀDA BUDDHISM』（原始佛教における我の論理）によって授与されたものです。

顧みれば、いろいろな事がありました。その中でも、特に嬉しかった事が二つあります。

一つは、カルカッタ大学で、人徳第一のスコマル・チョウドリ博士（パーリ学部助教授）と学究第一のディパック・クマール・バルア博士（パーリ学部長）の両先生から、懇切丁寧な指導を賜った事です。学位論文の総纏めの頃は、指導教授のチョウドリ博士の家に、二、三日泊

り込みの時もしばしばであった。朝起きて、直ぐに先生と向きあい、論文の検討、昼食、その後、先生とともに二時間余り昼寝、この昼寝が何んとものんびり……いいものだ。インドならでは……。どちらからともなく起き出して、二人でおいしいダージリンティで喉をうるおし、また先生と机に向きあい論文の訂正、書き直し……等々……夜までと言った具合で、三食昼寝つきの何んとものんびり、有り難い指導を受けた。

もう一つは、善光寺海外留学僧に決定した時です。それはインド留学も三年が過ぎようとして、留学費も乏しくなり、思案している頃のことです。昭和六十年十二月八日、お釈迦さまが悟られた日、悟られた場所のブッダガヤー大塔を参拝して、暫く草むらにひとり座している時、同じく大塔を巡拝に訪れた、善光寺海外留学僧第一回タイ派遣の梅田尚平師に遭った。ここで善光寺海外留学僧育英会の話を聞き、これは不思議な縁と、私の諸事情を書き、育英会宛に手紙を出しました。早速、黒田武志理事長より、『どうぞ頑張って下さい。やる気さえあれば、おのずと道は開かれる。お金は何んとでもなるもの。当育英会は、現在アメリカ、タイに限っているが、何んとか協力してあげたい。理事会に諮るため、題は何んでもいいから、小論文を至急送って下さい』と、独特の大きな文字の短い、何んとも言えず底力の湧いてくる返事を頂いた。すぐに、「インドの大地を歩む」と「原始佛教における無我」の二つの小論文を送った。すると間もなく、『あなたを当育英会の第二回留学僧に決定しました。毎月幾らの奨学金が必要か知らせて下さい。あなたに関しては、一年とは限らず何年でもインドで思う存分研究をつづけて下さい。必要なだけの奨学金を支給します』と、黒田武志理事長から、何んともおおらかな、

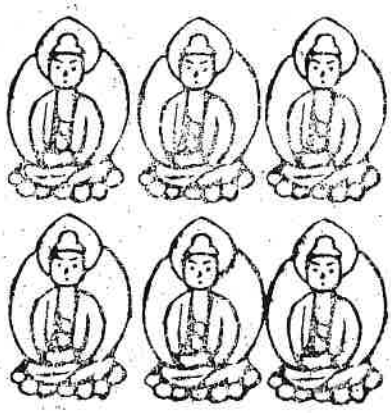
底の抜けたような便りを手にしました。

この底ぬけの援助によって、あと三年でも四年でも、のんびり焦らずに留学できるとの甘え心とともに、心豊かにおおらかになった。これらの、見えると見えない不思議な力によって、すべてが好転し、その後、二年足らずで学位論文を提出し帰国することができた。

ただただ、善光寺黒田武志住職はじめ檀信徒のみなさま、善光寺海外留学僧育英会、そしてカルカッタ大学の諸先生、陰となり日向となって私を励まし、また反対に貶して下さった方々にも、私をこれまで見守って下さった両親、ご先祖さまに感謝、感謝のみです。

私自身の力では、どうにもならない事に直面した時に、ただただ無心に立ち向かっていると、どこからともなく不思議に、不思議な力が働き、必要な時に、必要なだけのものが与えられた。まったく不思議だ。この不思議が私を活かしているのか。おかげ、おかげの、おかげさまが身に染む……しみじみと……。

合掌



インドの結婚式

東方研究会専任研究員
清水晶子

インド内陸部のデリーの十月はぬけるような青空とまだまだ強い日差しが照りつける。とはいっても三カ月にわたる雨期が完全に終わって、それからの数カ月間は最も過ごしやすい季節である。たて続けにダセラ・ディワーリーといったインドの二大祭りが宗教のいかんを問わず全土で催され、お祭り気分が一色に彩られる。また通りで結婚式の行列にしょっ中出くわすのもこの頃からである。

私のインドでの留学生活がスタートしたのが、ちょうどこのダセラのお祭りの前だった。その上、ご厄介になったお宅の一番下の息子さんの婚約式を一週間後にひかえていたので、すでに遠方の親戚の人たちが滞在していて、大家族がさらに大所帯になってにぎやかだった。奥様たちも三カ月後の結婚式の前夜に開かれる女

性たちだけの宴会の余興のために、毎日歌とドラムのレッスンに余念がなかった。そんなこともあって、異国での新生活をはじめる不安などはすっかり忘れて、喜びに浮き立っている家族の人たちとすぐにうちとけた。そして、毎夕二

結婚式の前夜祭レディース・サンギータ

階のベランダから見える華やかな結婚式の行列を通して、少しづつインドの姿が見えはじめた。

インド人—特にヒンドゥー教徒にとって、結婚は神様に対する義務といわれ、通過儀礼の中では最も重要視されている。インドは多様性に富んだ国といわれているように、結婚の儀礼も属するカーストによって、地域によって、そして宗教によってもさまざまな形態が見られる。

現在でも、配偶者を当人が選ぶ恋愛結婚はほとんど見られない。親同士がカースト、学歴、肌の色（女性は色白の方が望ましいとされている）、誕生星の相性、資産状況などの条件を十分に考慮して決定する。男性側にとっては社会的地位や職業が重視され、それによって女性側が用意するダヘージュ（持参金）の額が決められる。医師・弁護士・上級職の公務員などになると相当のダヘージュの呈示をしなければ結婚の成立はむずかしい。さらに挙式の費用一切は女

性側で持ち、相応の仕度をしてとなると、花嫁の父としては、「マハーラージャ（藩王）でも娘を三人もつと破産する」とことわざにいわれるほどの負担になる。

こうして縁談がまとまると、吉祥の日・時を選んで結婚式の日どりが星占いによって決定される。占いによっては、挙式が真夜中になるような場合もあるが、都市部では招待客の都合を考えて披露宴（饗応のみ）は、夕方から行われることが多くなっている。

さて、一月吉日の結婚式の夕方、ターバンを巻き見事な衣装に身をつつんだ花婿ラジーヴは、介添えの小さな男の子と白馬に乗り、自宅の玄関先で親類の人たちから祝福のティラク（額の印）を受けて、楽隊に先導されて華々しく式場まで行列をなして出向く。大学の中庭に設けられた鮮やかな色の大きなテントが式場になっていた。まず披露宴として、次々にやって来る招待客に立食形式でご馳走が出される。それからいろいろの儀式が進められていく。壇上で金色の刺繍で豪華に色彩られた真赤なサリーをまとった花嫁が父親から花婿に贈物として渡される儀式があり、その後新郎新婦は、白い花輪をお互いの首にかけ合う。そして最後の儀式が式場に設けられた天蓋付きの祭壇の聖火の前で行われる。二人は並んで坐り、パンディット（バラモン僧）の唱えるマントラに従って火中にギー（精製された油）・聖水・香木を捧げる。これらのものは祝祭儀礼には不可欠で、特に香木は周囲の空気を浄化し聖なる場所を作る役割を果たしている。また祭礼に火も欠かせない。とりわけ結婚の儀礼においては、千の目を持つといわれる火がその力を現して、結婚の証人となるのである。新郎新婦が互いの衣装の端を結び合って、祭火の周囲を七回まわる「七歩の儀式」をもって、二人は晴れて夫婦として認めら

メーンハディ

れる。新婦インドゥは新しい家族の一員となった。

インドで結婚式には二度招待されたが、どちらも商売を営むジャイナ教徒のもので、なかなか盛大だった。招待客も一、〇〇〇人から二、〇〇〇人くらいはいたかと思う。それぞれグジャラート州（西部）とパンジャーブ州（北部）出身の人の結婚式だったが、式次第はほとんど同じものであった。ただ、グジャラート出身の花婿のターバンの美しさや、男性の手にも描かれていたメーンハディの化粧、白馬の背に掛けられたすばらしいミラーワークの布などが強く印象に残っている。

結婚に関してもインドの若い人々は、かなり保守的で親の意志に逆らうことはしない。何よりも我身を置く社会の成員として認められることが大事で、そのしきたりを破ろうとはしない。人々にとって結婚の持つ意味は深い。

ひとりじゃない

山本瓔子

野原の道を　行くときは
ひとりっきりでも　ひとりじゃない
あまえんぼうの　草の実が
やたらと　足など　さわったり
すすきは　やさしく　手をふって
おいで　おいでを　していたり
みんな　ともだち　ひとりじゃない

林の道を　行くときは
ひとりっきりでも　ひとりじゃない
大きな声で　こじゅけいが
だれかれ　かまわず　呼んでたり
落ち葉の　こどもが　それきいて
くすり　くすくす　わらったり
みんな　ともだち　ひとりじゃない

日本の英語教育と私の英語力

愛知学院大学助教授　島　岩

日本の英語教育と私の英語力

名古屋大学でインド哲学を専攻した私は、修士に入学した頃から、インドで直接インド哲学の研究をしたいと考え始めていた。しかし、その頃、日本ですら、バイトで生計をたてなければならないような状態だった私にとって、私費留学など思いもつかず、インドに行く唯一の手段は、国費留学しかなかった。そのためにはまず、留学生試験に通る必要があったのである。

だが、留学生試験と言えば、まず問題になるのが、なんといっても英語力、それも、コミュニケーションの手段としての英語の能力である。ところが、その当時の日本の学校での英語教育は、文法と読解が中心で、英語を通して自己を表現する訓練は、全くと言っていいほど行われていなかった。すなわち、英語の能力をト

ータルに考えると、次のような図に表されるが、この中の四分の一に当たる能力（読解力）を養成することが、学校での英語教育の中心だったのである。いや、もっと正確にいえば読解力の中にも、日本語に翻訳しながら読むという精読力と話の全体の内容を大きくとらえるという多読力とがあるわけだから、このうちの精読力ばかりを重視していた英語教育は、極端に言えば、英語力全体の八分の一の能力を訓練する教育であったと言っていいだろう。もちろん、日常生活のなかで外国人と接する機会のほとんどない日本では、学校教育において、文法と読解による基礎的な英語力を養成することに重点を置くのは、理解できる。また、

媒体 能力	音声	文字
理解力	聴解力	読解力
表理力	会話力	作文力

明治以降、西洋文明を、文字を通して早急に吸収する必要があったという、歴史的事情のせいで、読解中心の語学教育となったということも、やむをえないものとして理解しうる。さらには、日本の大学の文科系、特に、文学部での教育研究が、古典研究を中心としており、そのためには、古典が読める英語力の養成に重点が置かれてきたという事情も理解しうるものである。しかしながら、それでも、四分の一の英語力養成のためにこれまで費やされてきた膨大な時間とエネルギーを思えば、これまでの英語教育は、あまりにいびつなものであったと言わざるをえないであろう。そして、この点が、現在の日本の国際化への動きのなかで、批判され、改善されるべき課題となっているところなのである。

このような事情はともあれ、留学生試験を半年後にひかえた私は、残りの四分の三の英語力を、英会話学校に通う経済的余裕もない状況の

なかで、急遽、それも自分で、養成しなければならないという、絶望的な作業に取り組まざるをえなかった。そこで考えたのが、（一）大学のＥＳＳ（英会話クラブ）に入ることと、（二）日本に来ている留学生と友達になることという、お金のいらない二つの方法であった。

ＥＳＳでは、『アメリカ口語教本』の中級をテキストとして用い、毎日昼休みに集まって会話の練習をしていた。修士にもなって、学部の学生と一緒にクラブ活動をするというのも気がひけたが、背に腹はかえられず、しばらく通った。しかし、そのうち、日本人どうしで会話の練習をしていても、それはしょせん畳の上の水練で、ものの役にはたたないのだということが分かってきた。すなわち、少なくとも私の場合には、英語でどうしても伝えたいこと、あるいは、伝える必要のあることがあってはじめて、会話が成り立つのであって、会話の形式ばかり練習しても駄目だということに気づいたのであった。それに、日本人どうしが英語でしゃべることにたいする照れがどうしても抜けず、それが英語での発話を妨げる心理的な障害となり続けた。

そこで私は、ＥＳＳはあきらめ、留学生との接触を深めることにした。ただし、言いたいこと、表現したいことを、英語という外国語を通して表現するには、自分の頭のなかに、日本語とは異なる表現回路を刻みつけておく必要があると思っていたので、『アメリカ口語教本』の中級のテキストは、学校への行き帰りを利用して、歩きながら、すべて暗記しておいた。そして、その一方で、ビルマからの留学生とつきあったり、その頃、交換留学生としてインド哲学研究室に来ていたケールさんに、日本語を教えるという形で、英会話の訓練を積んだのであった。

しかし、それでも、留学生試験はおろか、外国で生活するにはまだまだ足りない英語力しか

朝もやの中で

つかないという状態で、留学生試験にのぞまざるをえなかったのであった。

インド政府留学生試験

コミュニケーションの手段としての英語能力をつけようと悪闘苦闘していたわりには、さほど英語力のつかないまま、ほぼ半年後に、私は、インド政府留学生試験にのぞむことになった。このままでは、合格はおぼつかないと思った私は、留学生試験にさいして、まず、次のようなことを考えた。「留学生試験の面接では、必ず聞かれる質問があるはずである。つまり、試験官が最も知りたいのは、留学の理由がしっかりしているかどうかという点である。従って、(一)いままでどんな勉強をしてきたのか、(二)インドでどんな勉強をしたいのか、ということは必ず聞かれるはずである。さらに、面接の時間は

限られており、せいぜい長くて三十分であろう。だが、そのあいだに、試験官にいろいろなことを質問させてしまっては、私の英語力では、何を質問されたのかも理解できないという状況にたたされてしまうこともあるだろう。従って、試験官にいろいろと質問させないことが肝要である。すなわち、面接時間一杯こちらがしゃべってしまえばいいのだ」と。このように考えて、私は、先の二つの質問が出たら、とにかく、一つ十五分以上はしゃべりまくれるよう、答えを暗記した。すなわち、頭のスイッチをひねれば、自動的に答えが英語で出てくるという、「人間テープレコーダー作戦」をとったのであった。

それから、次のようなことも考えた。「インド哲学を勉強した者の特色は、現代ではインド人にとっても難解な古典語サンスクリット(梵語)を学んだという点である。この特色を生かさない手はない。サンスクリット語の作品の一部を暗記しておいて、暗唱してみせてやろう。そして、煙に巻いてやろう」と。そこで、私は、インド人に最も親しまれているヒンドゥー教の聖典『バガヴァッド・ギーター』の最初の部分を、それも、テープを聞いて節つきで、暗唱していったのであった。名付けて、「目玉商品作戦」である。

以上のような準備のもとに、インド政府留学生試験にのぞんだ。昭和四十八年の冬、寒いなか、東京の九段の靖国神社近くのインド大使館で、試験が行われた。

まず、午前中に筆記試験があった。問題は大きく二問に分かれ、一問は、インドについて大きく論ずるようなたぐいの問題であった。そして、もう一問は、インドの有名な人や出来事について、それぞれ簡単に説明せよという問題であった。私の斜め前で試験を受けていた女性は、解答用紙三枚にわたって、英語で筆を走らせて

いた。ところが、私のほうは、一枚の三分の二程度書いたところで、時間がきてしまった。

午後の面接では、当初の予想どおり、(一)いままで何を研究してきたのか、(二)インドで何をやりたいのかについて、質問された。私は、人間テープレコーダよろしく、質問に答えていった。ところが、「大学ではサンスクリット語を勉強しました」と答えたとき、比較的色の白いインド人が、突然、サンスクリット語をしゃべりはじめた。そして、「今言ったことを訳してみろ」と言われたのであった。その当時の私のサンスクリット語の能力は、貧弱な英語力のその足元にも及ばないという状態で、五、六行読むのに、辞書を引きまくって、ゆうに一時間はかかるというお粗末このうえない程度のものであった。「タパス」(苦行)という語が聞き取れた以外、皆目なにも分からなかった。しかし、半ば無意識に、分かりませんと言ってはお終いだと思い、「タパス」という語だけがよく聞き取れなかったふりをした。すると、今度は、別のインド人が、「タパスとは何か」という質問を発した。私は、冷汗をかきながらも、話題がかわったことにほっとして、「タパスとは苦行である」と答えた。するとまた、さきほどサンスクリット語をしゃべったインド人が、「この人は本当にサンスクリット語ができるのだろうか」という

ような疑わしい目付きで、質問した。「なにかサンスクリット語の作品で暗唱しているものがあれば、言ってみなさい」と。私は、かねて用意の『バガヴァッド・ギーター』の一節を、節つきで暗唱してみせた。すると、突然、その場の雰囲気は、面接から談笑に変わり、面接は終わった。発表はその日の夕方であった。私は合格していた。それも、七、八人中とは言え、トップであった。

私が合格したのは、ひとえに、『バガヴァッド・ギーター』を暗唱したおかげである。その当時は、そのことを、ただ、ラッキーだとしか思わなかった。英語も怪しい私を合格させた背後には、『バガヴァッド・ギーター』に代表されるような自国の精神文化にたいするインド人の深い誇りと、自国の精神文化を学ぼうとする者に対する広い寛容があったのだ、ということに思い当たるのは、留学後かなりたってからのことである。

インド最初の夜

インド政府留学生試験には受かったものの、日本からの仕送りをあてにできない私の経済状態では、渡航費自己負担、月四百ルピー（当時一万二千円程度）の奨学金で、インドの大学院の修士過程二年間を過ごすことは、困難であると考えた。そこで、日本政府の奨学生試験を受け直し、結局は、名古屋大学とプーナ大学との交換留学生第二号として、インドに留学することとなった。

昭和四十九年の九月初旬、私は、羽田をたち、インドへ向かった。心は、まだ見ぬ憧れの国インドへの期待に満ちていた。ボンベイのサンタ・クルス空港に着いたのは、もう、夜も遅かった。二時間以上もかかって税関を通り、疲れ

果てて外にでると、待ちうけていたのは、ポーターとタクシー運転手たちの群れであった。ポーターは子供が多かった。「こんな子供たちが、こんなに夜遅くまで働いているなんて」と感慨にひたる間も、また、「最初に値段の交渉をしておかないとボラれるぞ」と身構える間もなく、子供たちは、人なつっこい顔で私のそばにすりより、あっというまに荷物をとり、先を歩いて行く。こちらもしかたなく、そのあとを追う。彼らは、慣れたもので、私にドルをルピーに換金させると、さっさと顔見知り運転手のところへと案内する。私は、請われるまま、円の感覚で、十ルピー（当時三百円程度）をチップとして渡す。これは、インド人のチップの相場の十倍だ。

タクシーはボンベイの夜の町を走る。道端には、路上生活者たちが眠っている。タクシーが交差点でとまると、物乞いがよってくる。そして、バクシーシー（金おくれ）と窓から手を入れる。外は、夜とはいえ、まだ蒸し暑い。牛糞だろうか、変な臭いがただよってくる。しかし、不思議と嫌悪感はない。なにか懐かしい気がする。田舎で育った私の子供の頃には、まだ、道路は舗装されていなかった。その道を、ときには、牛や馬も通っていた。馬の引く荷車に乗せてもらい、藁の臭いに包まれて、学校から帰ってきたこともあった。橋の下で寝起きしていた浮浪者が珍しくて、友達と差し入れをもっていき、薪の火をかこみながら、いろんな話を聞かせてもらったこともあった。こんなことが、風とともに流れ込んでくる泥の臭い、糞の臭い、人の垢じみた体臭とともに、次々と脳裏に浮かんできた。タイム・マシーンで子供のころに戻ったような、とても懐かしい気持ちがした。

サン・エヌ・サンド・ホテルに着いた。タクシー代は百ルピー（当時三千円程度）払った。

これも、相場の五倍以上だ。でもそんな現実感はなかった。ボーイに案内され、部屋に入る。三百ルピー程度（約一万円）の部屋だ。ホテルの外とは全くの別世界だ。絨毯のしきつめられた二つの部屋とバス・タブのある浴室。一つは、応接セットのある部屋、もう一つは、ツイン・ベッドの部屋。洋画でしか見たことのない世界だ。子供時代の田舎から、突然、映画の世界にきたようだ。まるで現実感がもどらない。映画の主人公気分でバス・タブにつかり、ともかく眠る。朝がきた。時差のせいだろう（インドは日本より三時間半夜明けが遅い）、五時に目覚める。ベッドの上でグズグズしているうちに、六時になる。日が差し込んでくる。寝室から出て、

応接セットのある部屋へ出る。ドアーの下に新聞が差し込まれている。新聞を読んでいると、やがて、ボーイが朝食を運んでくる。甘いインド・ティーとスクランブル・エッグ、それに、ジュースと焼きすぎの食パン。食パンにママレードとバターをつけて食べる。優雅な朝。ここはどこだろう。あの貧しいインドなのだろうか。本当に、昨晩、あの汚い町を通ってここにきたのだろうか。とても不思議な気持ちがした。

このとき感じた不思議な気持ちは、今考えてみると、やはり、インドの持つ多様性にたいする驚きの念であったように思う。ほとんどの人が中流だと思い込んでいる均一な人々の国日本から来た私には、田舎の子供時代を思いださせる町並みと超近代的な高層ビルのホテルとが、また、午後の臭いがただよい路上生活者の眠る町と映画の中の世界のような最高級ホテルとが、同じ時代、同じ場所に併存するということが、信じられなかったのである。

ともあれ、この二つの世界の落差に対する不思議な気持ち、それが、私と現実のインドとの最初の出会いであった。そして、その気持ちが、重層的で多様なインド世界へと私を関わらせ続ける一つの根っことなっていったような気がするのである。

プーナへの道

――ダメ・モト主義のインド人――

インドに着いた翌朝、私は、ホテルを朝早く出て、ボンベイのヴィクトリア・ターミナル駅へ向かった。そこから、私の留学先プーナへの汽車に乗ろうというのだ。タクシーで駅に着いていた。しかし、まず、切符の買い方が分からない。一等で行くつもりだったのだが、どの汽車がプーナを通るのか、また、どこで一等の切

符を買えばいいのかが分からないのだ。駅の構内をうろうろしていると、また、怪しげなインド人につかまってしまった。若い男だ。人なつっこく近付いてきて、「困っていることがあるなら、助けよう」と親切げに言う。「プーナに行きたいのだけれど、切符の買い方がわからないんだ」と、私も今思えばとぼけたことを言うと、彼は、「切符売り場に案内してやる。でも、その前に、ドルをルピーに換えないか」と言う。

「どうゆうことだ」と聞くと、「銀行より換金レートのいいとこがあるんだ」と言うのだ。その頃、私はまだ、ブラックマーケットの存在など知らなかった。ドルを銀行以外のところでルピーに換えることができるなどとは、つゆ知らなかったのである。ともかく、なんでも、乗りかかった船にはすぐ乗ってしまうほうだから、一緒に行ってみることにした。彼は、駅を出て、狭い裏通りの路地を幾重にも回って歩いていく。「ここではぐれたら、もう帰り道は分からないだろうな」と思いながら、私もあとを歩いて行く。着いた所は、ミシンを踏んで着物を縫っているおじさんのところだった。「こんな所で換金なんかできるのかな」と思いつつ、言われるままに、ドル札を出し、ルピーと交換する。確かに、昨夜、空港の銀行で換金したときより、換金レートはわずかながらいい。なんだか、儲かった気分で、駅に戻る。

彼は、案内した手数料をいくらかくれと言う。こちらも、儲かった気分なので、気前よく、百ルピー（当時三千円程度）ほど手渡す。それから、駅員のところまで連れられて、切符を買う。確かに、一等で、プーナまでの切符だ。彼は、「まだ、汽車が来るまで、時間があるから、お茶でも飲もう」という。こちらも、なんだか、世話になった気分で、駅の二階の食堂へ行き、お茶を飲む。話しているうちに、彼は、「記念に

なにかくれ」と言う。「できれば、日本のお金がいい」と言う。こちらも、まだ、世話になった気分なので、ホイホイと記念に、千円渡してしまう。「じゃあ元気でね」と別れる。ここで、ふと、考える。そして、結局、ブラックマーケットで換金して浮いた分以上のお金を、手数料と記念のお金でとられてしまっていたことに気付く。しかし妙に腹も立たない。向こうがあまりに当然という感じで要求してくるので、それも、おしつけがましいところはあるにしろ、人なつっこく言ってくるので、なんだかアッケラカンとしていて、嫌な感じがしないのだ。

この人が、私がインドで最初に、お茶を飲みながら話をしたインド人である。確かに、日本には稀なタイプだなあと妙に感心した。『気配りのすすめ』とかいう本が、一時、日本でベストセラーになったことがあったが、そんな気配りなんか糞くらえというヴァイタリティーのようなものを感じたのである。すなわち、日本では、人間関係の持ち方が緻密というか、自分の言葉や態度にたいする相手の反応を頭のどこかであらかじめ予想しながら人と対応しなければならないというようなところがあり、また、なにかのことで一旦気を悪くされてしまうと、あと、取り返しがつかないというところがあるが、インドではそうでもないのかもしれないという予

感がしたのであった。そして、事実、彼は、インド人の一つの典型的なタイプであった。そのの ちの留学期間中にも、彼のように、駄目で元々という感じで様々なことを要求し、そのかわり、駄目でも、ケロッとしている、という人たちに、多く出会った。そして、私は、彼らを、「ダメ・モト主義のインド人」と名付け、自らも、彼らと対応するときには、インド人の上を行く「ダメ・モト主義」たらんとする戦いを挑むのであるが、残念ながら、その戦いは、いつも、負け戦であった。ただ、その負け戦のなかで、「嫌なことははっきり嫌だと言えばいいのだ」「ようするに言いたいことを言えばいいのだ」という態度は徐々に身につけていったように思う。ただし、そのことが、逆に、日本に帰ってからは、しばらくのあいだ、謙譲の美徳や根回しになじめないという形で、日本社会への不適合となって現れてくるのではあるが。　（つづく）

アメリカ留学体験記

善光寺海外留学僧　島崎義孝

はじめに

カンゼオン・サンガ（以下、KSと略す）はアメリカの最東北端、メイン(Maine)州バー・ハーバー(Bar Harbor)に本拠を持つ。旧都ボストンからは一時間のフライトで、車では五、六時間。カナダの有名な観光地ノヴァ・スコーシャ(Nova Scotia)までアカディアラインで一晩の船旅である。このあたり一帯は東部の避暑地であって、閑散期の人口はたとえばバー・ハーバーで四千人をいくらか越すにすぎないが、夏場には数十倍にもふくれあがり、膨張の程度はカリフォルニアのヨセミティ国立公園のそれに匹敵するのだそうだ。

一年のうち半分は暖炉に火が入っているような気候で、都市がもつ活気はないが、雄大な海と山の醍醐味を満喫できるアメリカで最も古い州のひとつである。厳冬期には零下二十度以上にも冷え込み、雪と風に封じ込まれて街は死んだように静かになるという。

レドゲロン（Ledgelauin）通りに面するKSの本部、カンゼオン・ゼン・センター（以下、KZCと略す）に筆者は十月上旬からおよそ二ヶ月間滞在した。小文ではKZCの概略と、それに先だつ筆者のおよそ一ヶ月間にわたるKS、ヨーロッパ摂心の様子などを記してみたい。

カンゼオン・ゼン・センターの活動・日常生活

KZCではこの十月十五日、前角老師（ZCLA主管）の高弟のひとりであるデニス・玄法・メルツエル師が日本曹洞宗公認の佛隆山法真寺住職として晋山式を挙行し日本式に言うならZCLA（佛真寺）の法類寺院となった。式典には筆者にも顔なじみの人が大勢列席され、ヨーロッパからも数人のKSメンバーがかけつけた。事情で来れぬ人達は西ドイツのどこかで同じ刻限に打坐の機会を持ったはずである。晋山式など日本でもそうたびたび見られるものでもないが、アメリカではなおさらのこと、何かの役にあたったほとんどの人は右往左往の連続で、差配にあたられた前角老師の苦労もひと通りではなかったと思われる。それでも式がすんで近くのレストランでの祝宴にもなると皆さすがにくつろいだ様子でまことに和かな雰囲気であった。玄法師のあいさつの最後の「サンキュー・エブリボディ」ということばはなんでもないごくふつうのしめくくりだが、レストランでの食事の調理や給仕あるいは記念品の包装までほとんど一切がKZCの人達の自発的な意志で行われていることを知っている者には結局そう言うしかないのだと納得されたはずである。グリーンガルチ（サンフランシスコ・ゼン・センターの支部）から、袈裟の縫製指導に来ておられた春浦尼が、新しいセンターは活気があっていいですねえと顔をほころばせておられたが、

アメリカではいわば老舗にあたるセンターの人ならではの余裕だろう。春浦尼とは筆者は二度目の対面で、五月中旬グリーンガルチに行ったさいには随分お世話していただいた。活気がある、とは言われたのもそのはずで、晋山式に先だつ二日前、準備作業の忙しいさなかにもかかわらず六人（男女各三人）が得度式を行ったからだ。そのうちわけはイギリス人三名、アメリカ人、フランス人、オランダ人各一名という具合でKSの性格をよく物語っている。KSでは得度、受戒に先だって本人が袈裟や絡子をしたてることになっているが、袈裟の縫製指導とはこのことである。日本からとりよせれば高くつくということもあるが、彼らはこれも修行のひとつと考えている。作務や坐禅の時間もさいて袈裟や絡子のしたてにせいだしていた。この六人以外にも筆者の滞在中に、いずれも女性だがポーランド人が得度、オランダ、イギリス人が

バー・ハーバーの風景

それぞれ一人ずつ受戒している。ＫＺＣはその「観世音」という名があるせいか、女性の数が多く、少なくみてもメンバーの六割強は女性によって占められていると思う。

アメリカではこれまでＺＣＬＡでの得度を何件かみたが、いずれも男性で、もとより式前に剃髪していた。ところがＫＺＣで見たそれはかなり様子がちがう。七人のなかで剃髪したのは男性二人のみで、あとは〈スポーツ刈り〉、女性のばあいはいわゆる〈ショート・カット〉、短くても二インチ（どこからそんな規準が出てくるのか筆者は知らない）で、見ている方としては余り共感がわいてこない。衣とか袈裟を坐禅のときのファッションか何かと思っているのだろうか。もっとも日本の坊さん連中のなかでも剃髪染衣で始終いる人はあまりいないので、われわれとしてもあまりえらそうなことは言えないのだが。

いやがられるだろうとは予想しつつ〈得度〉をすませた人たちになぜ剃髪しないのだと聞いてみたら、はっきりと答えてくれた人はひとりもいなかった。自分じしんに釈然としないものがあるのだろう。メンバーのなかにも、自分は将来、時が来れば授戒してダルマ・ネーム（法名）はほしいけれど、事情はともあれ小さな子供を国に放っておいて坐禅だ、得度だと言ってもそれではまったく意味がないと批判的な人もいる。しごくもっともな意見だと思う。日本ではハズバンドが日曜・祭日も接待ゴルフに出かけてしまって無聊をかこつ妻君たちのことを〈ゴルフウィドウ〉というそうだが、また一方では〈坐禅ウィドアー〉と言ってもいい放てきされた亭主や子供たちもいるわけだ。

剃髪についてはいろいろと問題があるだろう。それが女性のばあい問題は深刻だ。職場であれ家庭であれ周囲の人々に強い疑惑を与える

らしい。ＺＣＬＡのマウテンセンターでこの夏一緒だったイギリス人の若い女性は得度したわけではないが、剃髪するとどんなものかしらんということで興味半分に実験的にやってみたそうだ。その経験によると家庭の者は驚き、近所の人々には不信な目で見られ、友人知人にはか

らかわれ、街ではしばしば人がふり向いたりニタニタ笑われたり、とにかく髪の毛がないというだけで神経のやすまる間がなかった。人がいつも見ているという意識が強くはたらいたからだ。何度もかつらを買おうと思ったけれど、じっと髪の生えるのを待った。くじけずにがんばり通した自分はえらかった、と冗談まじりに笑いながら話してくれたことがある。しかし有髪のままの得度などナンセンスで、一度は剃髪してからでないとだめだ、ただ自分は二度とする気はないと言っていた。

ところでＫＺＣでは現在二十人足らずの人達がレジデントとして生活している。大半はヨーロッパからの人々であり、長期の人でも一年、たいていは外国人であることからヴィザの問題などもあって二・三ヶ月の滞在でそれぞれの国に帰っていく。往復の旅費や滞在費（長期のばあい月額四〇〇ドル、二・三ヶ月の短期のばあ

ポーランドの禅堂

い五〇〇ドル）もとりわけ外国人のばあいはバカにならない。アメリカ人の居住プラクティショナーも数人いるが、おおかたのメンバーはセンターの近くに住んでおり、各人の都合で朝夕の坐禅に通うというぐあいだ。いつも思うことだが、こういうところにやって来て何ヶ月も生活できるというのはどんな人達なのだろうか。今いる人たちの職種は園芸家、元精神療法医、画家、元学校教師、大工、図書館員あるいは学生、一般家庭の主婦・子女などである。それまでの仕事をやめて住み込んでいる人にも「失業」という悲壮感はなく、飽くまでも自身の選択である。とくにアメリカ人のばあいは楽観的で、蓄えがなくなったら何か仕事を捜し、いくらか溜ったらまたセンターに戻ってくるつもりだという。若い世代ではなく、四十代・五十代の独身者がこうなのであって、筆者などはアメリカは実に社会的紐帯のゆるい、物質的には恵まれ

た国なのだと思う。日本では今日でも終身雇用がひとつの原則のようになっていて、有休休暇でさえその半分は返上して働くという具合だから、二・三ヶ月も勤め先や家庭を空ければただごとではすまないだろう。基本的に社会のしくみじたいがちがうのだろうが、それ以上に個人意識というか、個人の生き方についての意識に何かしら大きな隔たりがあるようにみえる。どちらかというとわれわれ日本人のばあいは生き方の技術、たとえば学歴も含めて資格の獲得とか、経済面での安定などについては実に器用で熱心だが、自分の生き方そのものに対する問いかけといったことには関心がうすいのではあるまいか。もっとはっきり言うと、商売繁盛、家内安全・無病息災などの、より可視的な面での要求が、日本人のいわゆる宗教意識のひとつの大きな核になっているように思えてくる。

それはそれとして、例によってKZCの日常スケジュールを見てみよう。

五時　起床
五時三〇分　坐禅のちサーヴィス（朝課）
八時　朝食
九時～一二時四五分　作務
一時　昼食
三時三〇分　坐禅のちサーヴィス（晩課）
六時　夕食
七時三〇分～九時二〇分　坐禅
一〇時　消燈

摂心のときには起床が三〇分はやくなり、作務を一〇時まで二時間で終える。くりあがった時間にダルマ・トーク（法話）がある。通常、土曜日の午後と日曜日は終日自由時間になって

いる。見られる通り一日だいたい六～七時間を坐禅に費しているが、午後のそれは随坐である。たいていの人はこの時間も坐るが、メンバーのなかにはパートタイムで働きに出ている人もおり、日中は少し人がまばらになることもある。これまで筆者が滞在してきたセンターのなかではどちらかといえばニューヨーク州のマウント・トレンパーに似ているが、〈モナストリー〉という雰囲気はない。たとえば毎朝九時におこなわれる〈作務ミーティング〉では、各人が自分はきょう何の仕事をしますという具合だ。それでいて別に支障をきたすことはないようだ。全体にすべてがゆるやかで、アボットの人柄にもよるのだが、家族が一緒に生活しているためどうしてもそうなるのだろう。ただ坐禅中に階上で小さな子供が物音をたてていることもしばしばあり、せっかく遠くからはるばるやって来ている人たちには少々気の毒に思うことがある。

オランダでの接心

朝夕には代参がある。摂心中は坐りに来る人の数も三〇人ぐらいに増えるためか一日にだいたい三度にわたる。これはいわゆる事実上の参禅だが、玄法師が老師に代わってプラクティショナーを個別に指導する。またKZCには〈グループ代参〉というのがあるが、毎週火曜日の朝と夜にそれぞれ一炷の坐禅の後おこなわれている。呼び名や形式はちがうが、ZCLAの〈小参〉に似ている。ZCLAでは問者がひとりずつ立ち、形式にのっとって老師に質問したり自分の所感を述べたりというやり方だが、KZCではひとつのテーマについて色々な意見をめぐらすという形態だ。筆者の知った範囲でいうとこれまで〈八正道〉〈修行〉〈師弟関係〉などがテーマとして扱われ、ばあいによってはプラクティショナーに話題を提示させる。しかし様子をみているとほとんどの場合、けっきょく〈センセイ〉である玄法師のモノローグになってしまい、あまり彼等じしんの独創的な意見や発想が出ているようには思えない。選ばれたテーマにあまり関心がないせいだろうか。こういう機会には外から集まってくるメンバーもけっこういる。

一方、KZCでは地域にとけこむ試みも行っている。これはまだ始められたばかりで、いままで四回開かれたにすぎない。〈パブリック・トーク〉と称しているが、専門用語をなるべく使わずに、ストレス解消とか精神安定のためのひとつの方法として坐禅の効用を説明したり、あるいはばあいによってはKZCの活動の説明そのものも求めに応じて行っている。聴講に訪れる外部からの人の数は十人前後で、毎回少しずつ顔ぶれがちがうようだ。近くのスーパーマーケットに小さなパンフレットを掲示したり、メンバーがなにかの商売をしている場合は店内にも〈パブリック・トーク〉の案内を置くというように地道な活動をしている、このときは仏像

を撤去し、センターの人々も衣や黒のハビットは着ず平服のままである。もとより木魚とか磬子など、とくに仏教色の濃い鳴物類は使わないし、ろうそく・線香も使わない。ユキュメニカル＝超宗派・超教派という表現をしているが、仏教や坐禅が日本におけるほど親しまれていない、とりわけバー・ハーバーのようなアメリカの小さな町では必要な心くばりなのだろう。

またバーン・レイズイング(barn raising)というコミュニティ・ワークにも積極的に参加している。これはもともとは初期の移民時代の入植者の互恵活動で、家屋・納屋などをもちまわりで共同して建てたところからこう呼ばれるらしい。アメリカの地方部では伝統的な慣習である。今日では学校とか、集会所のような施設が対象で、われわれKZCの居住者は総出で近くにある小学校の運動遊技場の建築補助に精出した。

誕生の経緯

アメリカの仏教グループはごく一部を除けば、大半は一世代も経ていない新しいものばかりだ。KSはそのなかでも最も新しいグループのひとつだと思うが、ここではKSの設立にいたるまでの経緯を事実上の創立者である玄法師のライフヒストリーとからませて追ってみたい。それはある意味でアメリカ（あるいはヨーロッパ）における仏教グループ成立のひとつの典型を示していると言っていいだろう。

玄法師は一九四四年、ニューヨーク市ブルックリン(Brooklyn)に生まれた。育ったのはロサンゼルスである。大学時代には水球の選手だった。まさにカウンター・カルチャー世代のただなかにあったといえる。チームがオリンピックに出るまえ六六年には水泳をやめ、長髪・髭ぼうぼうのヒッピースタイルで、バックパックひとつ背負って方々をうろつきまわったという。二二才のとき結婚したこともあるが数年を経ずして別れ、しだいに宗教書にも親しむようになった。しかしまだそのころはいわゆる世俗的な関心が強く、自分の生き方に迷っていた。だが鈴木大拙やアラン・ワット(Alan Watts)に耽溺するようになって、我流で坐禅を始めた。誰か師に就こうという気持はなく山の小さなキャビンにこもって一日七、八時間坐っていたこともある。自分の師は自分であり、他に習う必要はないと考えていた。その頃をふりかえると実に傲慢だったと思う。学校の教師をしたこともあるが、それもやめて砂漠地で生活しながら坐禅を続けているうちここで大きな精神的変革を経験した。決して深いものではなかったが、この体験を他の人にも分ち与える必要があると強く思った。一九七一年のことだったという。そして翌年五月、友人に伴われてZCLAの摂心に行った。ここで玄法師は初めて前角センセイに会うことになった。当時のZCLAは前回のレポートで述べたように設立後数年を経ただけでメンバー数も七〇人前後にしかすぎなかった。もとより規模も小さく、現在の禅堂とサンガハウスだけが施設のすべてだった。前角老師はすでに安谷白雲老師から印可を受けていたが、玄法師が会ったときはまだ〈センセイ〉と呼ばれていたのだそうだ。そして間もなくZCLA滞在中の苧坂光能老漢からも印可を得て〈老師〉になった。前角老師はこのとき四一・二才、自

カンゼオン・ゼン・センターの人々と

信満々でＺＣＬＡの充実に心血を注いでおられたのだろう、それがまだ若いデニス青年には〈冷淡で、虎のような〉人間に見えたらしい。苧坂老漢はそれに先だつ数年前から年に二度の割合でＺＣＬＡに来て摂心の指導をしておられた。一度に長いときには三ヶ月以上の滞在もあったそうだが、たいてい七日摂心が指導の対象であった。当時およそ八〇才、最後のアメリカ訪問で、デニス青年は老漢と二度の摂心をもったが、何度か参禅にいくうち、堅固ななかにも人を包み込むような暖かさを感じたというのが玄法師の述懐である。青年デニスの目には光龍老漢のほうが好ましく映ったようだ。逆に前角老師にはどうしようもない尊大傲岸な若僧に見え、むしろそれを老師は買われたのだろう。同じ年のある摂心のさなかこの両者の間で行われた人をにんまりさせるいい話があるのだが、それは筆者がひとりで楽しむことにしていまは書かない

でおきたい。

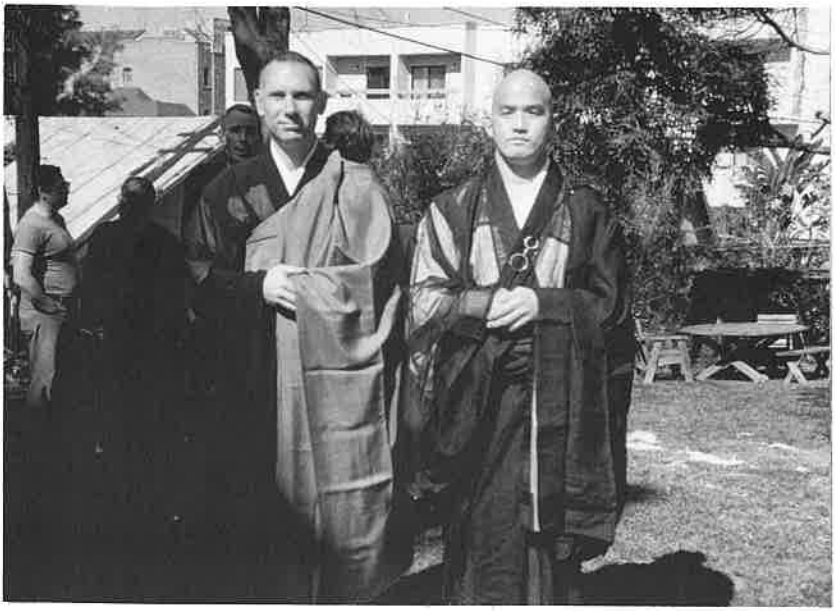
いずれにせよこの年からデニス青年は前角老師を師としてZCLAで坐禅をするようになった。ただこの時はまだ例のヒッピー姿のままで、ガールフレンドとセンターのすじ向いの家に住んだり、ロサンゼルスの北一五〇キロにあるサンタ・バーバラ(Santa Barbara)のキャビンで生活したりという具合で腰が定まったというわけではなかったらしい。老師はZCLAがもちろん活動の中心で、月に一度二日坐禅指導のためにサンタ・バーバラに足を運んでいたそうだが、徹玄師(玄法師の法兄。ZCNY主管)の後日談によるとデニス青年の監視の意味もあったらしい。一九七三年十月に得度するが、このときも自分はゼン・モンクになりたいのであって、仏教徒になりたいのではないと突っ張った。しかしけっきょくうまく丸め込まれてしまって受戒、そしてしばらくしてから得度ということになってしまったと玄法師は笑いながら語ってくれた。

余談になるがZCLAの記事を書くために資料を調査したさい、比較的初期に得度した少なからぬ人たちがセンターを離れているのに気がついた。こういう人たちと今日も個人的に交流があるのか、また彼等はどこかほかのセンターに入ったのかなと玄法師に尋ねてみた。当時親しかった人々とはもちろん今でもひんぱんではないが交際があるし、去って行った大部分の人も独自で坐禅を続けているばあいが多いのではないか。理由はいろいろあげられるが、特定のセクト宗派あるいはそれに伴う伝統的な宗教儀式にこういう人たちは概してあまり関心がなく、むしろ自分にあうやり方を方々からとり入れて自己流にやっているのではないか、ということだった。〈アメリカ流〉というべきだろうか。アメリカにおけるある種の宗教のあり方を示しているように思えて興味深い。

さて、得度した翌年、七四年にはそれまで続けてきた非常勤の学校教師をやめ、日中は事務所のスタッフとして働き、朝夕は道路向いのアパートから通ったが、そのうちＺＣＬＡに移り住むようになった。

七八年はＺＣＬＡがはじめて年間を通じてのトレイニングプログラムをつくり、それにしたがってメンバー数も一年間に三倍増したという。筆者がレポート執筆のためＺＣＬＡで調べてもらった資料では、設立の当初からほぼ一定のペースで会員数が増え、これは八二年まで続いている。記憶ちがいか、もしくは資料の集計の誤りであろうか。いずれにしてもこれに前後する数年間ＺＣＬＡの中心的なスタッフのひとりとして働いたわけだ。同じ七八年には他のメンバーの修行を助けるための個人面談を任され、翌年には公案を終えたという。

ところがひとつの大きな変換期があって、八



メルツェル玄法師（右は筆者）

四年には多くの人達がＺＣＬＡを去った。メンバー数の一貫した著しい増加に対して内容がついていかなかったといえるだろう。筆者は詳しい理由を審かにしないが、どこでもよくあるように人間関係の様々なもつれがあったと思われる。玄法師じしんもそのひとりだった。ハワイで僅かの間だが他のグループの人々と接触をもったこともあるらしい。だが同師のばあいはすでに〈センセイ〉資格で、それに先だつ二年前、すなわち八二年にはヨーロッパからＺＣＬＡに来ていた人々の招きでオランダ、イギリス、そして少し遅れてポーランドに出むいている。もちろん摂心指導のためである。話によるとごく大雑把にみてそれぞれの国に六〇人前後の人々がいた。ＺＣＬＡを出てからは夫人が子供とハワイの親元に仮寓していたことから、ヨーロッパとアメリカの間をしばしば往復したこともある。そのうち家族と一緒にアムステルダムに住むようになり、住居のフロアを開放して週の内三日間は、夕方、人々と坐禅した。同時に右の三ヶ国で一ヶ月に一度の摂心をもったという。そして八五年にはアムステルダム市内に待望の禅堂を構え、八人が住み込み、摂心のさいには二〇～三〇人の人が来た。しかし第二子ができ、夫人がアメリカに帰りたがったり、ヴィザの問題があったためヨーロッパをひきあげることにした。なにより彼じしんヨーロッパの人々の修行態度に不満があったらしい。センターに住み込んで坐禅しようというのではなく、趣味程度にしか考えていないように見うけられたからだという。そしてまたハワイに住むようになったが、ヨーロッパにも継続して同じような割合で摂心に行っていた。

バー・ハーバーには八四年、現在ＫＳのメンバーになっている人の招きで来ていらい間歇的にワークショップや数日間の摂心をもったこと

がある。ヨーロッパからアメリカに戻って後、国内に適当な禅堂を持ちたいと考えていたが、バー・ハーバーの人達がそれを実現してくれた。地理的にもヨーロッパとアメリカを往来するのに便利であり、冬場はじっくり坐り込めると思ったので家族をひき連れて移り住んだ。八七年、四月のことであるという。KSの強い協力をえて、ワークショップを行っていた建物を購入したのはちょうど一年前一九八七年の十二月である。この建物はもと修道女院で、地上三階、地下一階、百年ほど前の建造になるという。外側は赤レンガ、新緑の頃には蔦が美しい。内部はいくつもの部屋に分れているが、二階のもとは礼拝所であったらしい部屋を禅堂にあてている。二十五人も坐ればちょっとした動作のときにも身体が触れてしまうような小さな禅堂だ。三階は玄法師一家の住居である。そして今年八月末、ちょうどオランダでの摂心中この建物のすぐ隣の家が売りに出されるというニュースが入り、十月上旬には早々とKZCレジデントの引っ越しが始まった。筆者がいまいるのがその建物で、木造三階建、地下もある。少し老朽化しているのと、一般住宅であるため多くの人が生活するようにはできていないので、修理や改築を要し、今のところは作務の時間がもっぱらそれにあてられている。

ところではじめにKSはアメリカ、ヨーロッパにおける仏教グループ成立のひとつの典型を示していると述べた。仏教は欧米社会においてはキリスト教とは異なり、歴史も浅く人々にあまり知られていないために、はじめから大きな支持をうることはきわめて稀である。したがってたいていのばあい最初は摂心などを方々で行なって、一定数のメンバーを集め、それをしだいに拡大しつつ、一定の建物を活動の中心に据えていくようになる。

（未完）

善光寺だより

第五回留学僧派遣

善光寺海外留学僧派遣育英会は、二月四日第五回留学僧として五名を選考決定し、辞令交付式をおこなった。

午前十時より不動殿において、黒田理事長、佐藤常務理事及び新美事務局長が面接をおこない、午後一時より釈迦殿において、黒田理事長導師のもと、本尊上供（法要）を厳修し、五名の留学僧の道中安全、修道無難、学業成就を祈願し、次いで黒田理事長より辞令交付、佐藤常務理事が挨拶を述べた。

この日、育英会理事である大本山総持寺祖院監院鷲見老師も遠路わざわざ出席され、五名の留学僧に激励の言葉を述べられた。また海外留学僧派遣の大業推進に深く共鳴しておられる名著普及会・小関社長も出席され、五名の留学僧に対し、それぞれの研究内容に応じ、この度六冊の名著を贈呈し激励された。

五名の留学僧は次のとおりである。

記

派遣先	宗派	氏名
米国　禅センター	曹洞宗	村畑　亮二
英国　オクスフォード大学	曹洞宗	引田　弘道
タイ国　ワット・パクナム	臨済宗	山本　浄月
韓国　東国大学	天台宗	茂松　性典
日本　大正大学	韓国・曹溪宗	韓　京洙

（なお、山本浄月は昨年十一月出発している）

以上五名の派遣により、第一回よりの派遣者

総数は二十二名である。派遣国は、インド、スリランカ、タイ、中国、韓国、日本、アメリカ、イギリス、フランスの九ケ国に及んでいる。

節分会と大日如来開眼法要

二月三日十一時より、恒例の節分会が行なわれ、併せて、大日如来の開眼法要が厳修された。

佐藤俊明老師を導師に戴き、厳かな中に式は無事終了した。これによって、不動殿はより一層充実して、身替り不動明王様と共に、いままで以上に檀家のみな様をお守りいただくこととなった。

〈大日如来開眼香語〉

恭しく惟れば成寿山善光寺開創二旬を閲す　其の法運の盛んなること他に類を見ざるところなり　然も与麽なりと雖も堂頭大和尚自らの功を誇らず　折にふれて語るに曰くこれひとえに不動明王の御威徳なりと宜なる哉一昨年衿迦羅制陀迦の二童子を勧請し　今再び錦戸新観大佛師入魂の造顕本地佛大日如来の尊像を迎請し開眼供養を厳修し奉る　真に是れ至純の聖業というべし　俊明請に応じて十方の編照の聖眼を開き奉る　這裡如何が讃仰せん　即ち供具の奠儀を備

えて清浄の一炷香を拈じ一揭を奉頌す

面如満月坐安禅
妙相端厳瞻仰鮮
成寿山頭開佛眼
霊光特地照人天
曜竟如何
無邊春色平成、暁　瑞気維新遶法延

ナリスのまごころ会で講演

二月二七日、京都タワーホテルに於て、ナリス化粧品のまごころ会の集いがあり、黒田方丈は「生きがいのある人生」というテーマで約一時間の講演を行った。

当日は百二十名の参加者でにぎわい、三五名の子供たちによる素晴しい鼓笛隊の演奏も行なわれた。その中には六年前に方丈が名付け親になった子供も出演しており、新たな出逢いに感激も一入だった。

ご寄付御礼

〈海外留学僧派遣育英会〉

岩波　道俊殿　五十万円
伴　鉄牛殿　一万円
清水　真一殿　一万円
瀧澤　武雄殿　六万円
芦辺　鎌禅殿　二万円
瀬之間政勝殿　十万円
遠藤　清勇殿　十万円
栄光道院殿　五万円
河野富美江殿　三万円
鐙　喜三郎殿　一万円
香　最寺殿　一万円
西村　房蔵殿　三万円
翠雲堂殿　三万円
名村　純雄殿　一万円
柴田　秀晃殿　一万円
敦岡　白鳳殿　二万円
出井　義章殿　二万円
筒井　覚明殿　二万円
山野井生花店殿　三万円
井口義文・夕美殿　三万円
久保田賢一殿　二十万円
錦戸　新観殿　十二万三千円

〈成寿賛助〉

中村　定典殿　一万円
村上　博中殿　二千円
石川　孝禅殿　一万円
恩田　通子殿　一万円
吉原木工所殿　一万円
阿部　慈園殿　一万円

（三月十八日現在）

第六回海外留学僧募集について

目　的　大学卒業相当以上の学力を有し、仏教を修学する者のうち、学業操行ともに優秀にして心身堅固なものを海外に派遣し、仏教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る優秀な人材を育成することを目的とする。

派遣先　世界各地

派遣期間　一年間とするも場合により延長するも可

給　費　派遣先までの往復旅費及び滞在に要する必要経費を支給する

募集人員　2～3名

提出書類　(1)　保証人と連署した願書　(4)　卒業証明書
(2)　卒業証明書（写し）　(5)　推薦書
(3)　履歴書　(6)　論文

提出レポート
●禅の国際化と私の役割　●二一世紀の仏教と私の役割
●タイの仏教に学びたいこと　●未来社会の仏教と私の役割
いずれか一題を選ぶこと、枚数はいずれも四〇〇字詰原稿用紙五～一〇枚

原稿〆切　昭和六十四年十二月二十五日

善光寺海外留学僧派遣育英会事務局

●読者からのお便り

皆様ご多忙の御事と存じます。私も無事おかげ様でここワットパクナムにて過させて頂いて居ります。
渋井師も数日前地方へ行脚に出かけられました。
ここの住職様も大分お元気になられた様にございます。
一昨日は『成寿』第11巻冬季号を一部ご恵送賜わりまして誠にありがとうございました。それぞれ大変すばらしい方々の執筆にて又内容も密度濃く、読ませて頂きましてとても嬉しく思いました。
それぞれ皆様のお力によって築かれつつある善光寺様の意図なされている人の和、釈尊の道への布教がより一層拡ってゆくことを願ってやみません。大変励みになりました。
善光寺様の点じられました灯を少しでも守ってゆく一人になりたいと思います。タイの方々とも仲良くなってもっと色々のことをお互いに話し合いたいと思っています。皆同じ釈尊につながる仏教徒です。また地球に住む人々の連帯においてもっと仏教は布教されなくてはならないと存じます。
こちらの皆様にもいろいろと親切にして頂いて感謝しています。
ピイチャイ師も何かと氣を使って下さり日本語もだいぶお上手で、今も毎日勉強されているそうです。私のタイ語はまだまだです。

タイ・ワットパクナム　**山本　浄月**

いよいよ御壮健にて御接化のことまことに有難く存じます。本日は『成寿』第十一号御恵送頂き厚く御礼申し上げます。留学僧派遣の快挙益々充実し、ただ嬉しく存じます。上智大学の安齋氏が貴師について新聞に掲載されたのを拝見し、同じ宗教学会の仲間で、クリスチャンが賞讃しているので、とても嬉しくなりました。御軀御自愛を念じます。

東京都世田谷区　**櫻井　秀雄**

方丈様にはご健祥のことと拝察申し上げます。
先日は、鎌田先生の還暦のお祝いでご丁重なるお言葉をいただき感謝いたしております。また、本日『成寿』第十一巻を送りいただきありがとうございました。
大学時代は河内義宣君と同じくIBIに属し、海外の禅についても関心がありましたが、再びこの問題に目を向けねばと考えています。今後共よろしくご指導賜わりますようお願い申し上げます。

横浜市泉区　**石井　修道**

厳寒の候、善光寺におかれましては、ますます御繁栄のこととお慶び申し上げます。

扨て、このたびは〝成寿〟冬季号をお送り頂き、御礼申し上げます。

このたび、タイを訪問し、多くのお寺や遺跡を拝見し、タイの場合、宗教的な祈りや信心が、日常生活の中に〝自然に〟しみ込んでいるように思いました。これは何故かが、私のテーマにもなりつつあります。

東京都千代田区　遠藤　宣雄

昨日成寿冬季号を送って下さいまして有難う御座居ました。長男亡後、苦悩の日々を送り、私共浄土宗の和讃会（お経）に入会させて戴いて、日々を送って居ります。先月の黒田先生のテレビ御出演を東京の嫁から知らせられ、心待ちして居りましたが、北海道では入らず、録画を送ってくれるとの事で待って居ります。友人の御世話で般若心経入門（松原泰道著）を暇を見ては讀んで居りますが、仲々苦痛が薄れず、本日も朝から悩んでいた時に、成寿号が送られてまいりましたので私の様な凡人には仲々解せぬ所も多くありましたが、それなりに解しつつ、むさぼる様に拝讀させて戴きました。何となく拝讀後の苦悩の薄らぎに感謝致して居ります。今後共、御指導下さいます様お願致します。時節柄方丈様にはお身大切にして下さいませ。

北海道　西川　順子

本年もあますところわずかとなりまして御多忙のことと存じ上げます。過日、十一月二十七日、正雄の十三回忌には御世話おかけ致しまして無事回忌をすませることが出来まして寂しい思いの内にもほっと致しております。ふりかえってみますと、方丈様に墓地のないまま何年も遺骨を、おあずけ致した事からの御縁をいただき有難いことでございました。

御伺い致す度々の有難い御法話、少しずつでも生活致すことへの教訓と致しております。子供達のやさしい心くばりと、健康にめぐまれて幸にすごすことの出来ますのも善光寺さまの御縁をいただくおかげと厚く厚く御礼申し上げます。

横浜市緑区　石川　多加子

今夕、バングラデシュで村落開発および職業訓練学校をやっている石飛博雄氏より電話あり。今月三日に成寿山にバングラのテーラワーダ僧と一緒に訪問し、貴僧より多忙の中、おもてなしをうけたことの報告がありました。

本人、今の時世では仲々奇篤な御仁で、小生の若い友人の大学時代の仲間として縁ができたものです。バングラを相手に苦闘していることは、

相当以前より聞いてはいました。本人に逢う前からその取り組む国と仕事の内容から、ただ脱帽するのみでした。なぜならバングラと聞いただけで小生は敬遠せざるをえないからです。小生からみてえらい人と思います。

これを御縁によろしく御芳情賜ること願い上げます。

八日市場市　**池田　憲彦**

善光寺様には益々の御繁栄のこととお慶び申し上げます。此の度は夏季号に続き、冬季号のご恵贈にあずかり有難うございました。

夏季号では御住職様の四人の御子息様のタイ法式の得度式の様子を拝見させていただき浄らかなお姿にただ感激いたしました。

歴史的にも稀有なることとか、心よりおよろこび申し上げます。

又、その記念にお迎えになられました、金色に輝く、おごそかにお美しいお姿の「プラ・プッタ・チナラート」仏に魅せられてしまひました。お寺の今後の御発展をお護り下さることでございましょう。冬季号では留学僧の方々のご活躍又論文を読ませていただき、御住職様の熱情がかくあらしめたのだと頭が下がりました。

「比叡の光」にご出演の御住職様に二回ともお逢ひすることが出来、まだ一度もお目にかかった事はありませんのに思った通りの暖かいお人柄が伝わって参りました。

これからも遥かに仰ぎ見ながらお後を従って参りますことをお許し下さいませ。

今後共よろしく御教示下さいます様にお願ひ致します。

北九州市　**鳥屋原　百合子**

先日いろいろ有益なご講話賜りましたる上、お心のこもった編集の『成寿』ご恵贈と相成、厚く御礼申し上げます。早速ご挨拶可申上処、偶々、感冒に襲われ休んでおりました為遅れましたことをおわび申し上げます。

特に夏季号、上座部得度式の記事と申しますよりは、そのご行為に感銘を深く致しました。十数年前バンコクアユタヤを始めスコタイ・スワンカロークを巡歴したときのことを遥かに思い起こした次第でございます。

また、留学生の派遣というご壮挙につきましても、かつて天台山に上ったとき老師から日本に留学している若い僧を紹介されたこと。中国、社会主義圏から仏法に帰依し、文革によって荒らされた学問を日本に於て学ぼうとする若い僧たちの気概に感服したものでありました。今後もご指導の程お願い申し上げます。

ご挨拶代わりに私の旧著の内、保存

版として作ったものが手許にありましたので別便でお送り申し上げます。ご笑納賜りますれば幸甚に存じます。

東京都港区　山口　修　合掌

年号も改まり希望あふれる平成元年となりました。
先日は節分会に際しまして、善光寺様の家門繁栄の御祈禱札と福折を頂戴致しまして、誠にありがとうございました。家内と共に厄払いをさせて戴きました。平素とかくお便りも差し上げず申し訳なく存じております。この度はお心にお掛けいただき厚く御礼申し上げます。来る三月十八日の春彼岸法会には一所懸命にお話をさせて頂きます。
時節柄一層の御自愛御発展をお念じ申し上げます。
右略儀ながら書中で挨拶申し上げます。

川崎市　揶子てんや

久納様を通しての御縁に度々の御誌『成寿』御恵送に預り有難き事と何時も深謝申し上げております。
今回は、方丈様タイ国の御修行の御様子目のあたりに拝見一気になつかしく拝読させていただきました。下りて私も愚息タイに転勤の節一カ月ほど滞在いたしましたバンコックの様子を思い出しました。孫達もタイ語を良く話し買物は何時も一緒でないと困ったものでございました。
在タイ四年ほどでございましたが子供はおぼえが早く本当に助かったことも思い出しました。

東京大田区　中島　久子

A CONSTANT SMALL STREAM CAN WEAR A STONE

This 12th issue is the first in the new Heisei era. Looking back, the magazine Seiju was first published in the autumn 6 years ago in celebration of the 15th anniversary of this Temple.

The successful continuation of the magazine owes to the valuable sustenance by everyone of the supporters of the Temple as well as to the contribution of articles by the priests studying abroad.

The other day, formal ceremony was held to award the appointment of the priests to study abroad under the 5th program. Altogether, 22 priests have so far been sent to study in 9 countries. We are pleased to report the readers that priest Takashi Yasui studying in India was recently conferred a doctorate in the Calcutta University. This is an honor not only to himself alone

but to us all, too, and we feel encouraged to use more effort to further develop our Scholarship operations.

In his precept "Yui Kyo Gyo", Buddha preaches eight types of practices to be actively followed by ascetic priests. For the "shojin"(devotion to hard effort), the 4th type, Buddha says to the effect as 4th type, Buddha follows:

Nothing is unachivable if you continue every hard effort.

Evon a small stream can wear a stone so long as it continues to flow upon it.

If a priest in austerities should often deviate or neglect his effort, the way to the spiritual awakening will recede, just as you cannot build a fire by rubbing wood prieces if you stop rubbing it halfway.

I am used to take this precept as if it were given to me only, always oncouraging me to continue my effort like a small stream constantly flowing.

編集後記

▼昭和天皇の崩御というニュースは世界各国を走り抜けました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

『平成』という新たな時代を、本当に平安な世たらしめるべく、私たちひとりひとりが心の精進をおこたってはならないと感じます。

▼海外での研修を終えた留学僧が相次いで帰国されました。十二月にはスリランカより中野良教師が、アメリカからは島崎義孝師と岩波弘道師が無事帰国の報告をされております。帰国留学僧諸師の、日本における今後の御活躍に期待します。

▼長い間連載していただいておりました東隆真先生の『禅と衣食住』が、この度単行本になって発刊される予定です。長期にわたって御執筆いただきまして、本当にありがとうございました。

▼小倉玄照先生の「くらしの中で読む『正法眼蔵』」の連載が本号から新たにスタートしました。どうぞご期待下さい。

▼錦戸新観先生の力作になる大日如来が無事開眼のはこびとなり、いよいよ不動殿も内実共に充実いたしました。折にふれ親しくご参詣くださいますようお願いいたします。

▼去る二月二十一日、立正佼成会大聖堂において、庭野日敬師と当山住職の対談が行われました。今年は善光寺開創二十周年に正当し、さまざまな記念事業が行われておりますが、次号は二十周年の記念号とする予定が組まれておりますので、この対談を特集して詳しくお伝えしたいと思います。宗派を越えた活動の一端をご理解いただけたら幸いです。

▼三月十八日、恒例の彼岸会が行われました。あたたかな春の陽射しに誘われての参拝は、ご先祖さまと共に静かに六波羅蜜を振り返るよい機会でもありました。

▼暖冬の異変はまっ先に植物が感じ取るのでしょうか。黒姫山のこぶしが咲かないと伝え聞きます。（小熊）

成寿　第十二号
平成元年四月十日発行
発行所　成寿山善光寺
横浜市港南区日野町一六〇四
電話　〇四五（八四五）一三七一
印刷所　神奈川新聞社出版局

スミレ観音

統弾が土砂をはね
削裂した砲弾は大地をゆする
水びたしの壕の中から
暗い雨空を見上げるとき
壕のふちにしがみ付いた白いスミレ
わずかの根も雨足に叩かれ
間もなくずり落ちそう
雨にぬれて白いスミレの美しさ
雨も銃弾も、そして砲弾も
スミレには無縁のもの
今をただ美しく咲く
ああ、あの時のスミレこそ
観世音菩薩だったのか

「観世音声を限りに」より遠藤太禅

横浜善光寺